

T O K A I
S O C I E T Y
O F
P H Y S I C A L
E D U C A T I O N
2 0 1 0

2010

東海体育学会会報

NO.83

【東海体育学会】

〒480-1194 愛知郡長久手町大字岩作字三ヶ峯1-114 愛知県立芸術大学 美術学部 身体運動・健康科学研究室

TEL.0561-62-1180 (内線403) FAX.0561-62-0083

[ホームページ] <http://www.tspe.jp> 学会事務局 [E-Mail] tspe@htc.nagoya-u.ac.jp

知の創造分科会(日本学術会議)提言－保健体育の意義について－

東海体育学会会長 穂 丸 武 臣

東海体育学会第57回大会は昨年11月、愛知学院大学において盛況のうちに幕を閉じました。学会開催に際しまして、会場の提供を賜りました大学関係者をはじめ、すばらしい大会運営を行っていただいた実行委員会の皆様に深甚の謝意を表します。

総会において、会長(再選)と新理事が選出され、理事会は本年度の活動方針に基づき、組織・制度の検討をはじめ、学会活性化に向けて積極的に取り組んでまいります。

さて、日本学術会議は、我が国の学術研究の目指すべき方向を、今後10年から20年先を見据えた長期的視野から検討し、その結果を、「日本の展望-学術からの提言2010」として取りまとめ、本年4月に公表しました。その中で、知の創造分科会は「21世紀の教養と教養教育について」の提言を行っています。そこで、今後の教養教育における保健体育科目の意義について説明が行われていますので内容を検討してみました。

先ず提言の冒頭では、21世紀の現代社会の特徴や問題・課題を次のように整理しています。

第1は、現代社会の諸要請に対応しうる教養と教養教育の問題として、①グローバル化時代の特徴と課題、②メディアの地殻変動に対応しうる教養、③知の地殻変動に対応しうる教養の再構築、④市民社会の課題と市民的教養の形成、⑤現代社会の教養と教養教育の課題、の5項目です。

第2は、教養教育の充実と教養の再構築に向けてとして、①21世紀の教養教育の課題はとしてメディアと知の地殻変動に対応できる教養の形成を図っていくことが求められること、②21世紀に期待される教養として、学問知・技法知・実践知と市民的教養を豊かに形成することが求められること、③大学教育のカリキュラム編成の課題、の3項目です。

そして③大学教育カリキュラム編成の課題の第一項で、一般教育(ここでは外国語教育および保健体育を含む)は、教養教育の中核的な部分として、全ての学生が学修する「共通基礎教養」として位置づけられると同時に、一定の広がりや総合性を持つものであることが重要であるとしている。

さらに、一般教育における保健体育の意義について、少し長い引用となりますが大事な内容ですから全文を紹介しておきます。

「大学教育における体育・健康教育は、高校までのような多面的・包括的な教育課程によって制約されるものでないが、心身の健康維持や選択した種目の活動を通じて技量形成・仲間づくりに加えて、保健体育の意義、身体の理(ことわり)と自然や生活様式のなどの関係についての理解を深めるという点でも重要である。さらに言えば、この教育・学習活動は、芸術関連の活動とともに、非言語的(nonverbal)表現能力・コミュニケーション能力の形成という点でも重要である。学問知が主に言語を媒介として事物・事象の本質を捉え思考表現するのに対して、保健体育や芸術はそれらを含みつつ、情念・情意や感性といわれるものをはじめ、知性に取まりきらない人間性の深所を抉り出し、それを出・表現する活動である。体育や芸術の活動における自己表出・自己表現の作用は自己発見や自己との出会いの契機として、また、体育・スポーツにおける集団活動や芸術鑑賞は他者との共感・連帯・対話の契機として、豊かな人間性・市民性を培うという点でも重要である。さらには、日常生活においても、表情・身振りや振る舞い方などの非言語的要素が対話や人間関係や集団的活動の場を豊かにすることは言うまでもない。そうした多様な意義をもつものとして保健体育を豊かにしていくことも重要である。」

以上の提言に含まれている内容は、平成3年(1991)の大学設置基準大綱化以前から大学の体育関係者が一貫して主張してきた一般体育の意義や必要性が網羅されているものであり、21世紀のグローバル・情報社会において、保健体育の役割が再認識されつつあるように思えます。今後、私たちは教養教育と保健体育の拡充に向けて、提言が具現化されるよう尽力する必要があります。

文末となりましたが、前理事会は企画委員会・研究交流委員会が共同して、課題研究会や講演会などを行いました。課題研究の発表者と講師の先生、およびご協力いただいた関係者と会場校の愛知工業大学に厚く御礼を申し上げます。さらに、本年度もセミナーや講演会などを予定していますので、会員の皆様にご参加いただき、学会の活動を支援していただきたいと思います。

9月には、日本体育学会第61回大会が中京大学豊田キャンパスで、10月には東海体育学会第58回大会が至学館大学で開催されます。大会の成功を祈念する次第であります。

バンクーバー・オリンピック参戦記(コーチの立場から)

2010年2月に第21回オリンピック冬季競技大会がカナダのバンクーバーにて開催された。私は中京大学スキー競技部監督(当時)として、スキー女子モーグルに出場した伊藤みき選手の(北野建設スキー部所属、当時は中京大学に在学)サポートをするために現地に赴いた。選手として2回のオリンピック(1998年長野オリンピック、2002年ソルトレークオリンピック、スキーノルディック複合代表)に出場しているが、サポートする側として参加するのは今回のオリンピックが初めてである。全日本チームのスタッフとしてではなく、所属チームとしてのプライベートなサポートではあったが、今大会で感じたことを報告したい。

私は、スキージャンプとクロスカントリースキーの2つの種目を組み合わせて争うノルディック複合競技の選手として、1998年に行われた長野オリンピックと2002年に行われたソルトレークオリンピックに出場した。2回のオリンピックではメダルを獲得することができず、悔しい思いが残る大会となった。しかし、オリンピックへの挑戦を通じて多くのことを経験することができたと感じている。特に長野オリンピックは自国開催ということもあり、貴重な経験ができた大会であった。

2003年に引退した私は、将来スキーの指導者になる勉強をする機会を中京大学体育学部で得た。大学では、運動生理学やバイオメカニクスなどコーチングに必要な知識を学び、さらにスキー競技部のコーチとして実践の場での指導経験も積むことができた。2007年からはスキー競技部の監督として、全日本学生スキー選手権大会やユニバーシアードなどで活躍する選手の指導を行ってきた。

今回オリンピックに出場した伊藤みき選手は2006年春に中京大学体育学部に入學しスキー部に入部した。伊藤選手は高校3年生の時にトリノオリンピックに出場し、結果は第20位であった。高校生として初めてのオリンピックを経験したことで、4年後のバンクーバーオリンピックでの活躍が期待されていた選手であった。

バンクーバーオリンピックに向けて

昨年の3月に日本で開かれた世界選手権において伊藤選手はモーグル女子で4位、デュアルモーグルで2位

森 敏(東海大学 国際文化学部 地域創造学科)

の成績を上げた。トリノオリンピック後に順調な成長を遂げていた伊藤選手は、この大会で世界大会における初のメダルを獲得した。この世界選手権では、上村愛子選手がモーグル女子とデュアルモーグルの2種目で優勝し、2冠を達成した。ヤンネ・ラハテラコーチを始めとする日本チームのコーチ・スタッフ陣の強化が実った結果であった。

大学スキー部としては、伊藤選手が信頼するトレーナーとともに現地に赴きサポートを行った。メダル獲得、そして一年後のオリンピックの内定を手にするという二つの目標の両方を達成することができた。特に1年前に内定を得ることができたことは、1年後の本番に向けて選考のストレスにさらされることなくトレーニングや試合への参加ができることから大きな収穫であった。



世界選手権で2位になった伊藤みき選手

大学のスキー部では、モーグル競技の技術指導ができるスタッフがいなかったこともあり、モーグル選手の強化は全日本スキー連盟に任せている。普段の大学でのトレーニングは、基本的にはモーグル選手に関しては個人の判断に任せている。しかし、伊藤選手は他のスキー部員と一緒に練習を行うことも多く、クロスカントリースキーの選手と一緒に走ることもあった。決して十分な条件とはいえないが、設備の整ったトレーニング施設で良い練習ができた結果、世界選手権での成果に繋がったのであろう。

内定が貰えたことにより、伊藤選手のオリンピックに向けての1年間は計画的にトレーニングができると考えていた。しかし、練習は順調にはいかなかった。世界選手権での活躍により取材やイベント参加が増加し、さらに教員免許取得を目指した教育実習などが重なり思うよう

に練習時間がオフシーズン初期に取れなくなってしまった。ようやく7月ごろになり練習に集中できるようになった時に、怪我をしてしまい、トレーニングを休まなければならなくなった。10月に怪我が治り、再び全力でトレーニングができるようになったが、すぐに再度足を痛めてしまい、合宿先からの帰国を余儀なくされた。豊富な練習量をこなすことによって結果を出してきた選手だけに、練習が思うようにできなかったことは痛手であった。

2度目の怪我をした後は、シーズンの目標をオリンピックのみに照準を合わせて調整することになった。当初はシーズン開幕戦への出場も難しいと考えられていたが、トレーナーの協力を得てシーズンインには何とか間に合うことができた。しかし、リハビリ直後の体では満足した成績を上げられず不本意な結果が続いた。ピークをオリンピックにもっていくことを目標にはしていたが、思うように動かない体にストレスを感じていたようであった。1月に入り徐々に調子が上向き、オリンピック前にはワールドカップで一桁順位に入り順調な回復を感じられた。

オリンピック本番

2010年2月12日に開幕するバンクーバーオリンピックの5日前の2月8日に、私は日本を出発しカナダに向かった。今回も昨年の世界選手権の時と同じトレーナーに同行してもらい、伊藤選手のサポートのため現地入りした。到着時のバンクーバー市内はまったく雪がなく、気温も日中はプラス10度を超えるほど暖かく、まったく冬の季節を感じることはできなかった。もともとバンクーバーは2月の平均最高気温がプラス8度ということもあり、雪があまり降らない町である。しかし、このシーズンに関しては、ウィスラーなどの近郊のスキーリゾート地も雪不足に悩まされ、モーグルが開催されるサイプレスマウンテンにおいては、1月中旬からスキー場を閉鎖して会場の整備にあたるなど、雪不足の影響が大きいようであった。

オリンピック直前ということで、多くの選手や観光客が



バンクーバー市内

街中を行き交い、オリンピックの盛り上がりを感じることができた。私がオリンピックに出場した時は、大会に備えて競技場近くに宿を構えていたため、初めて知るオリンピック期間中の街の雰囲気であった。

バンクーバーにきた我々の目的は、伊藤選手に最高のコンディションでオリンピック本番のスタートに立たせることであった。お世話になっているマネジメント会社や4月からの所属先である北野建設スキー部の協力を得て、宿泊や治療室を確保することができ、最後の調整を良い環境で行うことができた。心配された怪我も回復し、良い状態になりつつあった。しかし、試合前の3日間は天候が悪く、雪不足もあって良い条件でトレーニングをすることができなかった。怪我による調整の遅れを考えると不安を残しての本番となった。

試合当日

2月12日にバンクーバーオリンピック開会式が開かれ、翌13日にスキー女子モーグルがサイプレスマウンテン会場で行われた。試合当日の天気は雨。風も強く霧もかかり、開催も危ぶまれる天候となった。試合当時に我々ができることは応援のみである。天候が悪く応援するには厳しい環境であったが、期待と不安を胸に会場入りした。



試合会場を目指す列



試合会場

試合会場はコース以外の会場周辺にはほとんど雪がみられなかった。コース作りは雪不足により苦労したとは聞いていたが、予想よりも雪が少なく、コース状況も決し

て良いとはいえなかった。しかし、降雨にも関わらず、多くの観客が訪れ、大会の雰囲気は盛り上がっていた。

15時ごろより公式練習が始まった。伊藤選手をはじめ、日本選手も順々に滑走した。伊藤選手は斜面の状態を確認するように丁寧に滑っているように見えた。外国勢の中には、積極的にエアを決めている選手もあり、本番に向けて緊張感が高まりつつあった。

16時30分から予選が始まった。5番スタートに日本選手1番手として村田愛里咲選手が登場した。チームの一番若い選手で、今回のオリンピックが初めての出場である。村田選手は積極的な滑りでゴールまで滑り下り、多少のミスは見られたが、22.99の高得点を出した。11番目に日本選手2番手として伊藤みき選手がスタートした。慎重に滑っているのか、スピードが足りないようにみえた。ターンとエアを含め大きなミスはなかったが、タイムが遅く村田選手よりも1秒以上遅い32秒05。点数も伸びず、21.81と村田選手に及ばなかった。シーズン中から苦しんでいた滑りが、オリンピック本番でも本来の滑りに戻りきれていないようであった。16番目には長野オリンピック金メダルの里谷多英選手が滑り、タイム29秒32、得点22.15。21番目に日本人選手最後として、世界選手権覇者の上村愛子選手が滑走した。タイムは29秒11、得点は24.31。上村選手は前年の世界選手権では他を圧倒する滑りをしていたが、この日は他にも良い滑りをしている外国選手も数名見られた。予選の結果は、上村選手が5位、村田選手が11位、里谷選手が13位、伊藤選手が15位であった。予選トップはハンナ・カーニーで25.96点。高いエアと正確で早いターンはすばらしく、タイムは27秒97の好タイムであった。

決勝は19時30分から始まった。雨が激しくなり、コース上部には霧がかかり視界が悪い中での試合となった。予選15位の伊藤選手は6番目のスタートで登場した。第1エアの360と第2エアのバックフリップを成功させたが、ターンは予選同様にスピードと切れが見られなかった。ゴールまで大きなミスなく滑走したが、タイムは31秒51。得点21.63。6人目終了時点で3位となり伊藤選手のメダル獲得は絶望的となった。8番目に滑った予選13位の里谷選手は第2エアのバックフリップでバランスを崩して転倒し、12.85点に終わった。10番目に登場した予選11位の村田選手は果敢な滑りをみせ、23.22点の得点を出し、10人滑り終わった時点でトップにたった。村田選手は初めてのオリンピックであるが、納得のいく滑りができたようであった。16番目に予選5位の上村愛子選手が登場。4回目のオリンピックで悲願のメダル獲得を目指す。第1エ

アでは高い360を決め、ミドルセクションで加速していく。スピードはあるがターンを完全にはコントロールできていないように見えた。第2エアのバックフリップはしっかりと決め、28秒88のタイムでゴール。得点は24.68点で16人終了時点では2位となった。金メダルはなくなり、メダル獲得は後続の選手の滑り次第となった。その後、予選2位のハイル選手が素晴らしい滑り見せ、タイム27秒91、得点25.69で上村選手を上回った。最後に登場した予選トップのハンナ・カーニーはエアを完璧に決め、ターンもスピードに乗った最高の滑りでゴール。タイム27秒86、得点26.63点で金メダルを獲得した。その結果、上村選手は4位となり、悲願のメダル獲得とはならなかった。他の日本人選手の結果は村田選手が8位入賞を果たし、伊藤選手は12位、里谷選手は19位に終わった。上村選手がメダルを惜しくも獲得できず残念であるが、メダルを獲得した外国勢は上村選手を上回る滑りをしており、結果を受け止めるしかないだろう。4年に一度の大会に調子を合わせることは難しいことではあるが、上村選手にはもう一度挑戦してもらいたいものである。

伊藤みき選手の2回目のオリンピックは12位という結果に終わった。前年の世界選手権では銀メダルを獲得しているだけに物足りない結果である。怪我に悩まされ思いうような滑りができていなかったシーズン中に比べて、この日の体調は良かったと伊藤選手は試合後に話した。無事にスタートラインに立たせるという我々サポートスタッフの目的は、ある程度達成できた。しかし、2度の怪我によるトレーニング不足と調整の遅れが、オリンピック本番で力を発揮することができなかった大きな要因である。その点で、オリンピックに向けてのトレーニング環境を十分に整えてあげることができなかったことは、残念でしかたがない。そして、4年に一度の大会に調子を合わせることの難しさを改めて感じさせられた。

伊藤選手は3月に中京大学を卒業後、上村選手と同じ北野建設に就職し、4年後のソチオリンピックを目指すことになった。私が直接関わることはなくなったが、4年後はこのような悔しい思いをしないように強くなってほしいものである。今回のバンクーバーオリンピックは、自分の現役時代とは異なる種目の選手のサポートを行った。準備の段階から大したサポートもできず、自分自身の力不足を痛感させられ、指導者としてもっと成長していかなければならないと感じた。今回の経験を生かし、今後もオリンピックで通用する選手を育てていきたいと思う。

バンクーバー・オリンピック参戦記(トレーナーの立場から)

内 藤 法 永(中京大学)

2月15日から20日にかけて、バンクーバーにて行われた冬季オリンピックを観戦しに現地へ行った。第1の目的は、トレーニング指導を行っていたフィギュアスケート種目の小塚崇彦選手(トヨタ自動車)の演技を見届けることであつた。

小塚選手とは、2008年の5月頃から①ジャンプ(特に4回転トゥループとトリプルアクセル)の成功率アップ②ショートプログラム、フリースケーティングともに最後まで演技をやり切れるための持久力アップの2つのテーマをもとに、フリーウェイトを用いたレジスタンストレーニングや、自重での体幹部や股関節周辺のトレーニング、ランニングメニューを中心に行ってきた。頻度としては週に2回程度のトレーニングと日々のケアの指導、長期の遠征などを行う際は、宿題形式でメニューを作成し、遠征中でもメールなどでトレーニングのアドバイスを送っていった。トレーニングメニュー自体は、フィギュアスケートの競技動作と特異性を考えた上で、かつシンプルで継続的な評価をできるものというコンセプトのもとで構成した。小塚選手自身が本格的なレジスタンストレーニングの導入は初めてということもあり、開始直後はフォームの習得や、メニューとして選出したトレーニング種目の意図の説明などに重きをおいて慎重に進めていった。またスケATINGによる身体への負荷を考えた場合、トゥループやフリップなど、後ろ向きに滑っている状態からのジャンプは股関節屈曲筋群への負荷がかかり、疲労も蓄積しやすく、さらに演技中はジャンプの着氷も含め片足で滑っている状態が続くため、バランスを維持するための内転筋群や外転筋などの疲労度も高く、日々のケアが重要となった。

フィギュアスケート選手の場合、氷上での演技全体を見るコーチと振り付けを担当するコーチ、陸上でのダンスレッスンやストレングストレーニングと、それぞれのコーチの指導を受けているケースが珍しくない。またコーチごとに選手のパフォーマンス向上のアプローチについての考え方があり、双方の意見が食い違う場合には、間に置かれた選手に迷いが生じる可能性があり、多少ならずとも小塚選手の場合にもあつたことは事実である。ストレングストレーニングを用いた身体能力向上の重要性と意義をしっかりと説くことができ、相手に理解させる能力

も、コーチにとって知識同様に必要だと感じた。

試合前のコンディショニングとしては、トレーニングの実施は、これまでの大会の場合は基本的には1週間前までとし、最終目標であつたオリンピック前では2週間前に終了し、残りの期間は氷上での練習を重点的に行いながらコンディションを整えていった。

オリンピック開催国のカナダに向かうにあたり、中部国際空港から成田空港へ飛び、その後カナダ・バンクーバー行きへと移動した。成田空港では、同乗者の中に有名オリンピック日本代表選手がいたこともあり搭乗口付近は報道陣も多く詰め掛けて騒然とした雰囲気となり、オリンピックという世界的なスポーツイベントの注目度の高さを感じた。また日本搭乗した便の航空会社が、日本チームのオフィシャルスポンサーとなっていた関係で、通路には選手団への応援メッセージが寄せ書きとして書かれた横断幕が貼られていた。



フライト時間は約9時間。機内では席の近くに、日本代表選手の親族の方や応援団の方々が搭乗しており、色々な話を聞くことができた。

バンクーバー国際空港に着いたのは、現地時間の午前9時過ぎ。吹き抜け構造で開放的な空港内の雰囲気は、オリンピック色といった様子で賑やかだった。その後、同じくバンクーバー入りしていた関係者の方に迎えに来ていただいて、バンクーバー市内へと向かった。カナダのブリティッシュ・コロンビア州にあるバンクーバーは、カナダの西の玄関口と言われる港湾都市でありながら、市街地の近くに山並が立ち臨んでいる。また近代的なビルも多く立ち並び規模としては、トロント、モントリオールに



続くカナダ第3となる大都市で、海と山や森などの自然を身近に感じられる環境は「世界で最も住みやすい都市」との呼び声もあるのだという。気候は、太平洋側となるバンクーバーは降水量が多く、そのおかげで豊かな雨林などの自然が広がっていると聞いていたが、滞在期間中はすべて晴天に恵まれた。気温については、出発前の日本でも話題になっていたのだが、思っていた以上に暖かく、日本の2月とほぼ同じくらいかそれ以上の暖かさを感じた。



宿泊所のあった場所は、ダウンタウンというエリアで、イングリッシュ湾に突き出した半島部分にある。市街地は、ロブソン通り (Robson street) とグランビル通り (Granville street) という大きな通りが交差し、その交差点を中心として大きく栄えている。そこから北に15分程歩くとウォーターフロントという港があり、そこには聖火台が設置され、写真を撮るための行列ができていた。全体として碁盤の目のような形で道や区画が整備されており、目印の建物や通りを押さえておけば迷うことなく歩くことができた。街中は、オリンピックムード一色といった感じで中心部では車両立ち入り禁止となっており、昼夜問わず各国の人々、色々な人種で混み合っていた。そんな中でも見かけたのが大道芸人や、試合のチケット (特にアイスホッケー・カナダチームのもの) の買い取りを求める人だった。所々で各国の言葉で書かれたボードや、カナダ旧来のものを思わせる柄や模様のオブジェが見られた。

2月16日、観戦に行ったフィギュアスケート競技男子シングルの会場は、バンクーバーの北東部にあり、ダウンタウンからは車で15分ほど離れたパシフィック・コロシウムにて行われた。会場内のあらゆる場所に係員や警備員が配置され、入場の際には手荷物検査や金属探知機による検査が行われていた。コロシウム内の雰囲気は、売店の並ぶ通路付近こそ人通りが多く賑やかだが、リンクやそれを臨む観客席となるとフィギュアスケート会場独特と言うのか、それともオリンピックという大舞台だからか、穏やかな中でも張り詰めたような緊張感があった。観客は地元カナダの人が一番多く、次いで日本、アメリカといった順で、他にもロシアやドイツなど多くの国旗が場内で揺れていた。



ショートプログラム (以下SP) 出場者は30人、小塚崇彦選手は第5グループ、全体で22番目での滑走であった。小塚選手は、演目『ボールド アズ ラブ』をバックに、序盤のトリプルルッツトリプルトゥループのコンビネーションジャンプを決め、続いてのトリプルアクセルは着氷が乱れたが、中盤のステップ、最後のロングスピンでは観客を唸らせる出来で、曲が終了直前に切れてしまうというアクシデントもあったが、結果は全体の8位となり、アクシデントを除けば本人も納得の表情のようだった。同じく日本代表の高橋大輔選手はSP終了時点で3位、織田信成選手は4位となった。

日本勢もさることながら会場を特に沸かせたのは、地元カナダ代表のパトリック・チャン、アメリカ代表エバン・ライサチェク、そして前回トリノ大会金メダルのエフゲニー・プルシェンコだった。ライサチェクはオリンピック前のシーズン中から課題と言われていたトリプルアクセルを見事に決め、黒の衣装で強調された長い手足を大きく使った演技やステップは、音楽と一体化しているように感じ、見るものを引き込む魅力を持っていた。プルシェンコは、出場選手の中で唯一SPに4回転ジャンプを取り入れ、コンビネーションも含めすべてのジャンプを成功させた。凛とした態度には、絶対なる自信と風格が感じられた。

2月18日、午前の早朝からパシフィック・コロシアムにて行われた試合前の練習を見学し、午後からはいよいよフリー・スケートイングとなった。SPの結果から上位24名が、成績の低い方から順に4つのグループに分けられ、同じグループ内では抽選により滑走順が決定された。小塚選手は第3グループ、全体で13番目の滑走であった。第2グループが終わり、いよいよ第3グループが氷上練習に入る。13番目の小塚選手の滑走順は、練習後すぐとなった。6人ずつがグループとなり滑っていく試合の進行の中で、グループ内の順番は選手にとって少なからず重要なものとなっている。2番目は、スケート靴を履いたまま待機する方が最善と考えられるが、3番目以降となると待ち時間は10分以上になる。気温の低いスケートリンクに、選手が待機する場所は氷ではない。スケート靴を脱いでウォーミングアップをする割合がその都度変化していく。5、6番目は思い切って靴を脱げるが、特に3番目が判断を迷うところだった。小塚選手には3番目以降は靴を履き替えてのウォーミングアップを薦めていたが、今回は、練習後そのままの流れで臨めるという理想的な順番となった。演目『ギターコンチェルト』に乗せて、小塚選手は序盤の4回転トゥループに挑み、着氷までの瞬間はそれこそ息をのむような緊張感があった。結果は両足認定となってしまったが着氷に成功、会場全体はほんの一瞬ジャンプの成功か否かをうかがうような静けさのような雰囲気となった（本人も感じていたという）が次の瞬間には大きな拍手と歓声に包まれた。その後もコンビネーションジャンプ、ステップ共に安定した滑りを見せたが、終盤のトリプルアクセルで惜しくも転倒。完璧とはならなかったが、最後までペースを崩すことなく滑りきることができ、結果はパーソナルベストを更新し8位となった。一方、圧巻だったのは、金メダルを獲得したライサチェクで、4回転ジャンプを入れない構成でありながら、すべてのジャンプを成功させ長身を生かしたダイナミックで表現豊かな演技によって滑りきった。独特な魅力を持った演技に終盤につれて次第に会場は盛り上がり、観客は早く立ち上がり、歓声を送りたいといったムードで、演技終了と同

時にこの日一番のスタンディングオベーションに包まれた。

興奮冷めやらぬ会場の雰囲気の中、ライサチェクの次に登場した高橋選手は、演技の序盤に4回転ジャンプに挑むも転倒。しかしながらその後のステップとジャンプなどの構成は完璧とも言える出来で、ステップと構成点において演技者中最高の評価となり、結果は4位のステファン・ランビエールを僅かに上回り、見事銅メダルを獲得した。

最終滑走者で登場したブルシェンコは、SPに続いて出場者の中でただ一人4回転トゥループトリプルトゥループのコンビネーションを成功させた。しかし、他のジャンプにおいては転倒や回転不足こそなかったが、どれもバランスを欠いた出来で、立っていられるのが不思議に感じてしまうような印象だった。後に話題となるのだが、結果としてはジャンプやスピン、ステップを含めて大きな加点を得られず、総合点ではライサチェクに逆転を許す形となった。

今回のバンクーバーオリンピック観戦は、世界最大のスポーツイベントの現地の様相を見ることができたのは、自身にとって大きな経験となった。フィギュアスケート選手にとっての競技力の構成要素を考えた上で身体能力の重要性について再認識させられる機会となった。構成やジャンプに対する評価、採点方法のあり方など大会後にいろいろ話題となった事もあったが、競技の根幹を支える身体能力の向上についての重要性には疑いの余地はないと思った。しかしながら、向上までのアプローチについては再考の必要があるとも感じた。小塚選手にとっては、オリンピックまでの昨シーズンは4回転よりもトリプルアクセルの完成度について課題が残る結果となった。簡単に跳べてしまう日もあれば、短期とはいえ成功のイメージまで失うほどのスランプに陥る時もあった。その原因がどこにあるのか、ストレングスやバイオメカニクスの視点から探ることで原因の早期発見、対応策を練ることもできたかもしれない。新たな目標に向け、課題克服と更なる向上に努めていきたい。

パラリンピック(歴史、現状、特徴)

道 用 亘(豊田工業大学)

1) バンクーバー2010パラリンピック冬季競技大会

2010年3月12日～21日の10日間、カナダのバンクーバー市およびウィスラー市においてバンクーバー2010パラリンピック冬季競技大会(Vancouver 2010 Winter Paralympic Games)が開催された。パラリンピックは主に身体障害を持つ個人が参加する障害者スポーツ競技大会の世界最高峰と位置づけられる。本大会では44カ国507名のアスリートが出場し、競技成績によりオリンピック同様3種類のメダルが競技者に授与された。国別にみるとロシアの38個を筆頭に、ドイツ24個、カナダ・ウクライナ19個の獲得数となっている。日本は参加国全体の6位にあたる金3、銀3、銅5の計11個のメダル獲得成績を収めた。金メダルは新田佳浩選手(左前腕切断)がクロスカントリースキー2種目にて(10kmクラシカル、1kmスプリント)、狩野亮選手(両下肢機能全廃)がアルペンスキーのスーパージャイアントスラローム(スーパーG)種目にて獲得した。これまでの日本の最高メダル獲得数は、冬季大会では1998年長野大会の41個(参加国21か国中4位)、夏季大会では2004年アテネ大会の52個(73か国中10位)である。



2) 障害者スポーツ:アダプテッド・スポーツ

障害者の身体運動に関して、1970年代よりAdapted physical activity、Adapted physical educationという言葉が用いられてきた。Adaptの和訳は「適合させる」。障害の有無や程度を考慮して用具やルールなどの環境を適合させることにより、障害者の身体活動・身体教育が実現される。今日では、これまで使用されてきたAdaptedという語に自発的な活動の意を汲んだSportを合成し、障害者が積極的に行う身体活動として、障害者スポーツをAdapted Sports(アダプテッド・スポーツ)と定義している。

3) アダプテッド・スポーツの歩み

189世紀より障害者のスポーツ活動は行われていたが、その目的は主に医療体操やリハビリテーションの観点であった。近代に障害者における身体活動の必要性が増加した原因は第一次・第二次世界大戦後に戦傷者が急増したためである。イギリスの神経外科医であったグットマン博士(Sir Ludwig Guttmann)は、1944年にストークマンデヴィル病院内に設立された、後の国立脊髄損傷センターにおいてセンター長に就任し、脊髄損傷者に対する包括的医療の一環として身体活動やスポーツを積極的に取り入れた。日本では中村裕博士が1960年にストークマンデヴィル病院に留学、医学的リハビリテーションの観点からスポーツの有用性を提唱、その実践を行ない、日本障害福祉の先駆となった。ドイツでは、ローレンツェン教授(Prof. Hans Lorenzen)が体育学的観点から身体障害者にスポーツ指導を行なった(「身体障害者スポーツ教本(1961)」)。

4) パラリンピックの発展

グットマン博士は、1948年病院内の庭にて退役軍人16名の参加によるスポーツフェスティバルを開催した。これは第二次世界大戦後初めて行なわれたロンドンオリンピック大会に合わせて開催されている。4年後の1952年、オランダ退役軍人が加わり総勢130名のスポーツフェスティバルに発展した。第一回国際ストークマンデヴィル競技大会(International Stoke Mandeville Games)である。1960年ローマオリンピック大会開催後にも、当地に

において国際ストックマンデヴィル競技大会が開催され、後に第一回パラリンピック競技大会と認定された。今日まで夏季13回、冬季10回開催されており、日本でも1964年東京大会、1998年長野大会の2回開催されている。次回は2012年ロンドンにて夏季競技大会、2014年ソチにて冬季競技大会の開催が決定している。参加選手は身体障害者が主であり、国際パラリンピック委員会(IPC:International Paralympic Committee)が統括している。パラリンピックの他に知的障害者によるスペシャルオリンピックス、聴覚障害者によるデフリンピックがあり、それぞれスペシャルオリンピックスインターナショナル、国際ろう者スポーツ委員会が運営している。

5)「パラリピック(Paralympic)」の語源

「パラリンピック」はオリンピック開催後に同地において、同施設を利用して行なわれることから、もう一つの、並行して行われる意の「Parallel」とオリンピック「Olympic」の合成語である。また身体障害者が主に参加することから、脊髄損傷「Paraplegia」とオリンピックを組み合わせた語の意もある。

6) 競技種目

現行の冬季大会正式競技は5種目である。

1. アルペンスキー

ダウンヒル、スーパージャイアントスラローム(スーパーG)、ジャイアントスラローム、スラロームおよびスーパーGとスラロームを合わせたスーパーコンバインドの5種目がある。スーパーコンバインドはバンクーバー大会より採用された。各種目はスタンディング(立位)、シッティング(座位)、ヴィジュアルリーインペアード(視覚障害)の3カテゴリーに分類され、各カテゴリー内で競技し、メダルが授与される(こ

のカテゴリーはクロスカントリースキー、バイアスロン競技も同じ、表1参照)。シッティングのカテゴリーは、競技者が座るバケットシートがサスペンション機能の付いた機器にて保持された1スキー板により構成されるチェアスキー(シットスキー)と二本のアウトリガー(先端に小さなスキー板が付属したストック)を使用して競技する。視覚障害者はガイドスキーヤーの音声誘導等が用いられる。

2. クロスカントリースキー

クラシカル、フリー、スプリント(バンクーバー大会より採用)種目に分類されている。障害や性差、種目によって距離が異なる(表1)。団体競技のリレー種目があり、男子:4km×1人+5km×2人、女子:2.5km×3人の構成となる。フリー以外の種目は走法(クラシカル:2本のスキー板を平行に推進させる、スケーティング:2本のスキー板を逆ハの字型に推進させる)が限定される。

3. バイアスロン

クロスカントリースキーと射撃を行なう。障害、性差により距離が異なる(表1)。また予選結果によって予選1位選手とスタート時間をずらして競技するパシュート(バンクーバー大会より採用)がある。射撃失敗数により滑走する距離・時間が加算される。

4. アイススレッジホッケー

脊髄損傷や下肢切断の競技者が二本のスケートの刃が付属したソリ(スレッジ)に座位し、二本のストック(グリップエンドにスパイク刃が付属している)によりアイスバックを操作し、身体を推進させる。国際アイスホッケー連盟(健常者のアイスホッケー競技統括)のルールに準拠し、15分×3ピリオド行なう。バンクーバー大会より女子選

表1.バンクーバー冬季パラリンピック競技大会の種目一部

競技種目		カテゴリー(クラス分類)		
		スタンディング(LW1(2)-9)	シッティング(LW10-12)	ヴィジュアルリーインペアード(B1-3)
アルペンスキー	男女	スラローム ジャイアントスラローム スーパージャイアントスラローム(スーパーG) ダウンヒル スーパーコンバインド(スラローム+スーパーG)	スラローム ジャイアントスラローム スーパージャイアントスラローム(スーパーG) ダウンヒル スーパーコンバインド(スラローム+スーパーG)	スラローム ジャイアントスラローム スーパージャイアントスラローム(スーパーG) ダウンヒル スーパーコンバインド(スラローム+スーパーG)
	男子 女子 男子ルー 女子ルー	10km個人クラシカル、20km個人フリー、1kmスプリント 5km個人クラシカル、15km個人フリー、1kmスプリント	10km個人、15km個人フリー、1kmスプリント 5km個人、15km個人フリー、1kmスプリント	10km個人クラシカル、20km個人フリー、1kmスプリント 5km個人クラシカル、15km個人フリー、1kmスプリント
バイアスロン	男子 女子	12.5km個人、3km/パシュート 12.5km個人、3km/パシュート	12.5km個人、2.4km/パシュート 10km個人、2.4km/パシュート	12.5km個人、3km/パシュート 12.5km個人、3km/パシュート



手の出場が可能となった。1998年長野大会までスレッジを使用したレース(アイススレッジ・スピードレース)競技も行なわれていた。

5.車椅子カーリング

1チーム4人の下肢障害者で構成され8エンドを対戦する。世界カーリング連盟(健常者のカーリング競技統括)ルールに準拠する。手部またはキューと呼ばれる道具を使い、各エンド2回ストーンを投げる。ハウスと呼ばれる的の中心に最も接近させたチームのストーンが、敵チームのストーンより内側にある数をそのエンドの得点とする。スウィーピングは行なわない。

尚、現行の夏季大会は、プロリーグも世界各地で開催される車椅子バスケットボールを始め、20種目開催されている。



7)クラス分け

競技の対等性・公平性を保証するため、パラリンピック競技全種目に「クラス分け」が行なわれている。これはたとえばボクシング競技の体重による階級制の様に、障害によって同競技種目内でクラス・階級分類する方法で、パラリンピック競技だけでなく他のアダプテッド・スポーツ全般において最も重要な概念のひとつである。

先に述べたように冬季競技種目はスタンディング(立位)、シットイング(座位)、ヴィジュアリーインペアード(視覚障害)の3カテゴリーあり、障害の有無や部位を考慮した運動機能分類・病理学的分類が行なわれる。さらに各カテゴリー内でも障害の程度によって運動機能が異なるため、競技成績に与える影響を考慮し、スタンディングはLW1-9、シットイングはLW10-12(LW:Locomotive Winterの略記)、ヴィジュアリーインペアードはB1-3(B:Blindの略記)のクラスに分類される。原則的に数字が小さいほど各競技に対する障害の程度が重度であることを示す。その詳細なクラス分類は「パーセンテージ制」として競技成績に反映される。パーセンテージ制はアルペンスキー、クロスカントリースキー、バイアスロン競技において実施され、実走タイムと各LW、Bクラスに対応した係数を掛け合わせることによって、計算タイムが換算され最終成績となる(表2参照)。



表2.パーセンテージ制の係数換算例(シットイングカテゴリー)
(クロスカントリースキー:各クラスの実走タイムが1分00秒の例)

LWクラス	実走タイム	係数(%)	計算タイム(最終成績)
10	1'00"	86	51"6
10.5	1'00"	91	54"6
11	1'00"	94	56"4
11.5	1'00"	98	58"8
12	1'00"	100	1'00"0

8)技術サポートとスポーツ器具の開発

現在のパラリンピック競技において、技術向上や器具開発への科学的サポートが必須である。健常者のアルペンスキーではカービングスキーが主流である。今回の

パラリンピックにおいてもチェアスキーにカービングスキーのターン技術が先駆的に取り入れられており、日本人選手のカービングターン技術に必要なチェアスキーを開発するシーンが幾度かメディアにて報道された。カービングターンは荷重によりスキー板エッジの形状を利用して回転する。理論的にスピードを落とさずターンするためには、スキー板をずらさずに、回転する接線方向に効率よく推進力を得られるよう回転する放線方向に身体をできるだけ傾ける必要がある。しかしながら従来のチェアスキーでは回転の中心方向に身体とチェアスキーを傾けると、チェアスキーを構成するフレームが雪面に接触するため、十分内傾することが困難であった。しかし今回チェアスキーメーカーと選手・コーチが検討を重ね、背面方向へ身体を可動させて荷重するチェアスキーを開発し、回転する際の内側前方のフレーム形状を小さくさせることで、カービングターン技術を可能にしたようである。アダプテッド・スポーツでは障害に応じて道具を改良させてスポーツを行なう前提があり、それが競技スポーツ最高峰の場面でも結実したといえる。今後も科学的データの蓄積・応用と技術的サポートが、パラリンピック各競技に必要である。

9) パラリンピックの課題：クラス分けとインクルージョン

パラリンピック競技大会では、障害の程度をどのように評価するか、下に示したような課題が提示されている。

夏季競技大会の水泳競技に出場する成田真由美選手（頸髄損傷）は1996年アトランタ、2000年シドニー、2004年アテネと3大会連続出場し、金メダル15個、銀メダル3個、銅メダル2個の計20個のメダルを獲得している。また大会当時の世界記録を13回塗り変え、2005年には国際パラリンピック委員会から最優秀女子選手賞の栄誉が与えられた。当選手がその翌2008年北京大会では無冠に終わった。原因のひとつにクラス分けが挙げられている。前3大会ではS4クラス（S:Swimの略記）であったが、北京大会では障害の程度がより軽度なS5クラスへと変更された。両クラス間では四肢麻痺の有無・程度に差がある。

2008年北京大会において陸上競技100、200、400mの3種目で金メダルを獲得したオスカー・ピストリウス選手（両下腿切断）は両下肢の下腿/足部のセグメントとして炭素繊維製の義肢を使用して走行する。当選手の最高タイムは健常者の記録に接近している。北京オリンピック大会前に当選手がオリンピック出場希望を表明したことで当時物議を醸した。国際陸上競技連盟（IAAF）

はスポーツ科学の観点から両義肢による走行を検証し、両義肢の機能が競技に有利に作用すると判断した。選手本人は両義肢がスタートおよびコーナリングに不利であることを強調した。結果として2008年北京オリンピック大会出場は見送られた。

このようなトピックは残存機能のトレーナビリティや、障害と外部環境のインターフェイスをどのように評価するか、その問題点を提示している。競技成績が障害の影響を越える変量に因るかどうかをどのように一般化するか、その境界域の選定や判断基準の構築が今後のスポーツ科学に求められており、その実現が競技の対等性をより厳密にすると考えられる。

尚、本文内の全写真は荒賀博志氏（奈良教育大学大学院）にご提供戴いた。また掲載に際して松井健氏（日本福祉大学）にご協力戴いた。ここに感謝の意を表する。

10) 参照資料

1. 矢部京之助、草野勝彦、中田英雄編著。アダプテッド・スポーツの科学。市邨出版。2004年10月28日初版第一刷発行。
2. 高橋明。障害者とスポーツ。岩波新書。2007年7月5日第3刷発行。
3. 池上康男、道用亘。アイススレッジスピードレースの動作分析。バイオメカニクス研究。2:303-306.1998.
4. 遠藤雅子。スペシャルオリンピックス。集英社新書。2004年2月22日第一刷発行。
5. 財団法人日本障害者スポーツ協会。[cited 2010 May 10] Available from:URL:<http://www.jsad.or.jp/>
6. International Paralympic Committee. Official website of the Paralympic movement. [cited 2010 May 10] Available from:URL:<http://www.paralympic.org/>
7. Brüggemann GP et al. Biomechanics of double transtibial amputee sprinting using dedicated sprinting prostheses. Sports Technology 2009; 1: 220-227.
8. Weyand PG et al. The fastest runner on artificial legs: different limbs, similar function? J Appl Physiol 2009; 107: 903-911.

バンクーバー・パラリンピックに参加して

今回のバンクーバーオリンピックはフィギュアスケートを中心に選手へのメダルの期待が大きく、メディアでは連日競技結果が取り上げられ、オリンピックは日本全国から注目を浴びました。結果日本は5個のメダル獲得し、日本国民に大きな感動を与えてくれました。

では皆さんはパラリンピックをご存知でしょうか。オリンピック後に行われるということを知っている方はいらっしゃるかもしれませんが、実際にどのような選手がどのような種目で競っているのかを知っている方は少ないと思います。



写真1: 力走するシット久保選手

パラリンピックは1948年（昭和23年）ルートヴィヒ・ガットマン卿（イギリス）によって執り行われた、スポーツイベントに端を発します。彼は、戦争によって負傷した自国イギリスの帰還兵を憂慮し、スポーツが彼らに再び生きる喜びを与えることができると考え、このイベントを開催しました。結果これは大成功に終わり、4年後の大会には、オランダからの選手も迎えることとなりました。そしてこの運動がパラリンピックへと発展したのです。（バンクーバー2010パラリンピック観戦ガイドブックより）

今回のバンクーバーパラリンピックにおいて、日本選手団は金メダル3個を含む合計11個のメダルを獲得することができました。オリンピックでのメダルが5個に対して、パラリンピックでは11個ものメダルを獲得しているのです。これは本当に素晴らしい事だと私は感じます。

その中で私がスタッフとして参加させて頂いたノルディック種目でも、多くのメダルを獲得することができました。

ではパラリンピックに引き続き、皆さんはノルディックスキーをご存知でしょうか。

ノルディックスキーとは北欧のノルディック地方と呼ば

北村 雅之（クロスカントリースキー・ワックスコーチ）

れる地域から発達したスキーで、もともと狩猟や交通手段として使われていました。北欧の人々の生活の一部であったものが、速さなどを競うノルディック競技へと発展したのです。ノルディックスキーはオリンピック・パラリンピックともに最初から行われている歴史のある競技で、起伏の激しいコースを必死に滑る姿と、スピード感あるレース展開が見どころとなっています。ノルウェーを中心に、スウェーデン、フィンランド等の北欧諸国で発達したので一般にノルディック（北欧の）スキーと呼ばれています。（バンクーバー2010パラリンピック観戦ガイドブックより）



写真2: クロスカントリークラシカルスプリント競技で力走する新田選手

※ノルディックスキーではクロスカントリー競技とバイアスロン競技が行われます。クロスカントリー競技は「雪原のマラソン」とも呼ばれ専用のスキーとストックを使ってタイムを競います。クラシカル走法とフリー走法があります。

バイアスロンとはクロスカントリースキーフリー走法の中に射撃を組み入れたレースです。

このような歴史ある競技ではありますが、日本での認知度はまだ低く、降雪のある地域が中心となる為、競技人口も決して多くはありません。

そしてこの競技におけるオリンピックでの日本選手のメダルはまだ一度もありません。

パラリンピックにおいては、長野大会で金メダル1個・ソルトレーク大会で銅メダル1個・トリノ大会では金・銀・銅と3個メダルを獲得しており、日本人選手の活躍が目立っています。

そして今回のバンクーバー大会では金メダルが2個・銀メダルが1個の合計3個のメダルを獲得することができました。

今回大会ではクロスカントリー種目の男子立位において、新田佳浩選手が金メダルを2個獲得しました。新田選手はパラリンピック4大会連続出場、ソルトレック大会では銅メダルを獲得しており、今大会において日本選手団の主将も務めました。

バンクーバー競技期間中は天候が安定せず、選手にとっては精神的にも厳しい大会となりました。前半戦メダルの期待がかかった競技がありましたが、選手や日本チームにとっては厳しい結果が続きました。そんな中、今大会日本チームがもっとも金メダル獲得を狙っていた、新田選手の10キロクラシカル種目において見事1つ目の金メダルを獲得することができました。新田選手はスタートから積極的にレースを展開し、前半の5キロで後続の選手を20秒離しました。コースとしては下り坂のカーブが急であり、登りが長く続く体力を消耗する厳しいコースでありましたが、体格的にも圧倒的に有利な北欧や、ロシアの選手を抑えての金メダルは前半戦において苦しい結果となっていた日本チームを大いに盛り上げてくれました。



写真3:バイアスロン競技での新田選手



写真4:メダルセレモニーでの新田選手

この他、新田選手は後半戦でも今大会から採用となったスプリント競技において金メダルを獲得し、見事日本選手団主将として結果を残しました。同じくスプリント種目の女子立位においては太田渉子選手が銀メダルを獲得し、太田選手は2大会連続のメダル獲得となりました。

今回のバンクーバーパラリンピックを経験させて頂き、改めて感じることは、障害をもった選手の滑りや、競技に



写真5:レース後の太田選手と鹿沼選手



写真6:バイアスロンにて力走る佐藤選手は名古屋市出身

対する気持ちは決して健常者に負けていないということです。競技のスピード感や迫力は実際に見るのとテレビで見るとは大きく違います。国内でもジャパンパラリンピック等大会が行われていますので、ぜひ一度見ていただければと思います。アスリートとして活躍する選手の姿からは感じ取れことも多くあると思います。



写真7:応援団と選手団

オリンピック程、メディアには取り上げられず、パラリンピックを知ってもらう機会はあまりないと思いますが、少しでも多くの方にパラリンピックやノルディックスキー競技を知っていただき、応援して下さる方が増えれば幸いです。

ノルディックチームでは各選手ブログも掲載しておりますので、そちらをご覧くださいければ選手もっと身近に感じていただけたと思います。是非パラリンピック日本ノルディックチームの応援を宜しくお願い致します。

【委員会報告】

企画委員会活動報告

企画委員会委員長 花 井 忠 征

2009年度の活動は、委員会・研究交流委員会の開催、講演会、課題研究「創造とスポーツ科学」発表会を行った。例年は、東海体育セミナーを開催していたが、2009年度は課題研究発表会の開催が決定しており、振替えて実施した。

1.企画委員会・研究交流委員会合同会議の開催

第1回 2月21日(土)

名古屋市立大学(山の畑キャンパス)

議題:①平成20年度活動報告

②東海体育学会講演会の実施について

③課題研究発表会の実施について

第2回 4月18日(土)

愛知工業大学(本山キャンパス)

議題:①研究交流委員の変更について

発育発達・測定評価分野

変更者:佐藤敏郎先生(新潟医療福祉大学
元春日井保健センター)

後任者:小栗和雄先生(静岡産業大学)

②「アダプテッド・スポーツ科学、介護福祉、健康
づくり」分野研究交流委員の追加承認

追加委員:石田直章先生(名古屋芸術大学)

③東海体育学会講演会について

④課題研究発表会について

第3回 6月27日(土)

中京大学(名古屋キャンパス ヤマテホール)

議題:①研究交流委員変更についての理事会承認報告

②東海体育学会講演会の担当について

③課題研究発表会の担当について

2.2009年度 東海体育学会講演会の開催

テーマ:『今、スポーツ教育を考える 一日比野寛(旧制
愛知県立第一中学校校長)の教育を中心に-』

講 師:木村吉次先生(中京大学)

司 会:庄司節子先生(名古屋経済大学)

日 時:平成21年12月19日(土)

午後2時30～4時30分

会 場:愛知工業大学本山キャンパス

講演会参加者数:29名



写真:庄司先生(左・司会)・木村先生(右)



写真:木村先生のご講演

本講演会は、6月27日に中京大学八事キャンパスヤマテホールで開催する予定であったが、猛威をふるったインフルエンザが中京大学でも発生し、学内施設が使用できなかったために中止となった。理事会の意向と、演者の木村先生のご協力により12月19日に開催する運びとなり、年末に実施することができた。この場をお借りして、お忙しい中日程調整をしてお講演くださった木村吉次先生にお礼を申し上げます。

講演の概要は、以下のようである。

木村先生は、パワーポイントと日比野寛の年譜(抜粋)、日比野寛述『管理私見(抜粋)』(明治37年刊)の資料を提示していただき、講演をされた。

平成20年3月の中学校学習指導要領の改訂で部活動を「学校教育の一環として、教育課程との関連が図られるよう留意すること」という方針が示され、今まで教育課程外に追いやられていた部活動が学校教育の中に再び位置づけられることになった。各学校がどのように具体的に展開するかが今後問われることになる。

そのとき、いままで行ってきたことを着実に発展させていけばよいと考える学校があるかもしれないし、また新たな

に相当の努力を傾けて従来と違った活動方針をとろうと考える学校が現れるかも知れない。いずれにしても、それぞれの学校のこれまでのあり方を振り返ってみることからスタートすることになる。各校の教育活動はどのように展開してきたのか、部活動をどのように位置づけていたのかを明確にする必要がある。これは、換言すれば各校の教育の歴史と伝統を回顧し、再検討することである。

その点に関して考えるとき、一つのモデルがある。それは、1899(明治32)年から1917(大正6)年まで愛知県立第一中学校(現旭丘高等学校)の校長の任にあった日比野寛の学校経営であり、そのスポーツを通しての人間形成の営みである。日比野は、生徒に運動部活動を積極的に奨励しただけでなく、自ら生徒の先頭に立って全校生徒の長距離走(マラソンということばがなかった当時から)を行ったり、ラケットを握ってテニスコートに立ったりして徹底したスポーツ教育を行ったのである。それは、我が国の中等教育界にあっては類を見ない先駆的なスポーツ教育であって、校長の職を辞した1917年に読売新聞主催東海道五十三次駅伝競走に関西組として単独で参加し、関東組に対抗したことや大阪朝日新聞主催の第3回全国中等野球優勝大会で優勝したことなどで一つの頂点に達した。こうした日比野校長時代の実績が愛知一中の伝統を形成し、日比野校長以後にも受け継がれたものとみられるし、また県内外の中等学校にも影響を及ぼしたと考えられる。このような日比野のスポーツ教育の実際とその伝統化を検討して、そこから私たちは今、何を学ぶことができるのかを考えさせていただいた。

3. 課題研究「創造とスポーツ科学」発表会の開催

東海体育学会は、2002年度に開催された50回記念大会(名古屋大学)において初めての試みとなる課題研究「情報と身体」を企画し、学会活の活性化を図ってきた。今年度は、学会のさらなる発展と活性化を期待して第二段の課題研究発表会を企画しました。今回の課題研究は、「創造とスポーツ科学」と題して、人類、社会、文化、地球、環境などに対し体育・スポーツ、健康などの分野における新しい価値や方向性を見出す研究や取り組みについて研究発表をしていただくことにした。

そこで、本課題研究について、各研究分野から社会に対して貢献することが大と考えられる新規的でユニークな研究、研究開発、先駆的な実践的取り組みなど、新たな観点で研究や実践に取り組んでおられる先生を

推薦いただいた。

課題研究発表会は、8月、10月、12月の3回に分け、一回の発表会に4つの研究分野から新規的な研究発表を行っていただいた。各界の研究発表者と演題は下記に記した。

なお、今回の課題研究発表会で発表していただいた研究者の方には、発表内容をまとめていただき、書物として出版することにした。

〔第1回発表会〕

日 時:平成21年8月1日(土)

会 場:愛知工業大学(本山キャンパス)

司会進行:吉沢洋二先生(名古屋経済大学)

参加者:27名

発表者と演題:

①鈴木壯先生(岐阜大学)

スポーツ選手のカウンセリング事例を通して創造について考える

②山本達三先生(愛知学泉大学)

日本人の体力低下-「体力・運動能力調査」にみる年齢・時代・世代の影響-

③春日晃章先生(岐阜大学)

子どもの体力低下と防止策

④寺田恭子先生(名古屋短期大学)

重度障がい者とスポーツ

(寺田先生は、体調不良のため発表取消し)



写真:春日先生(左)・山本先生(中央)・鈴木先生(右)

〔第2回発表会〕

日 時:平成21年10月24日(土)

会 場:愛知工業大学(本山キャンパス)

司会進行:湯海鵬先生(愛知県立大学)

参加者:23名

①庄司節子先生(名古屋経済大学)

代日本の地域社会における女性スポーツ普及の諸相-大正期の東海女学生キツツンボール大会を事例に-

②中野貴博先生(名古屋学院大学)

日本と東南アジアの子どもの生活および衛生習慣の違い

③石垣 享先生(愛知県立芸術大学)

地球温暖化による暑熱期間の延長と熱中症予防対策

④水藤弘史先生(愛知学院大学)

クロールにおけるストローク技術の評価法について



写真:水藤先生・石垣先生・中野先生・庄司先生(左から)

〔第3回発表会〕

日 時:平成21年12月5日(土)

会 場:愛知工業大学(本山キャンパス)

司会進行:石田浩司先生(愛知県立大学)

参加者:32名

①岡野昇先生(三重大学)

「文化的実践への参加」としての体育授業の創造

②石田直章先生(名古屋芸術大学)

障がい者に対するレジスタンス・トレーニングの効果の検証

③片山敬章先生(名古屋大学)

低酸素トレーニングによる生活習慣病予防の可能性

④坂口俊哉先生(中京大学大学院)

内水面遊漁環境の利用価値評価-トラベルコスト法を用いた試み-



写真:坂口先生・片山先生・石田先生・岡野先生(左から)

4.研究交流委員会活動報告

体育方法研究分野の活動報告

報告者:石垣 享(愛知県立芸術大学)

昨年度は、瀬戸市教育委員会主催の「フラグフットボールの指導法」の講座に東海体育学会会員も参加させていただくことで、教科教育的観点からこのスポーツの指導法について考える場を持つための合同企画を行った。本企画は、2008年度に名城大学で実施した「フラグフットボール養成講習会」とは内容が異なり、受講対象者が小中学生の先生であることから、子ども達にこの競技をいかにして理解させるかに着目し、最終的には試合までに発展させる指導法について講習を行った。実施日時は、2009年8月28日(金)の13:00~16:30であり、場所は瀬戸市立水野中学校であった。講師には、南山中学・高校男子部教員であり同校アメリカンフットボール監督である朝内大輔先生(東海体育学会会員)および愛知県立小牧養護学校の日谷勝己先生と愛知県立芸術大学の石垣で実施した。

講習会後のアンケートでは、児童・生徒達がお互いにコミュニケーションを取りながら競技を進めることが可能な種目であり、教育的な価値の高い種目であるとの意見が多く認められた。ただし、運動能力の差による衝突事故等の防止策については、今後の課題として検討すべきであることが指摘されてもいた。

なお、本企画は理事会が開催されないような期間に急な決定であったため、これについてのアナウンスが不十分であり、東海体育学会員からの参加は1名のみであった。この点は大いに反省すべき点であり、夏期の企画については、内容の承認から広報および実施までを考えると、6月までに立案する必要があると感じた。

現在進行中の企画は、バレーボールの指導法研修会を静岡産業大学の小栗和雄先生に依頼しており、今年度中に開催できるように調整を進めている。

発育発達・測定評価分野の活動報告

報告者:藤井勝紀(愛知工業大学)

東海発育発達・測定評価分科会では、日本発育発達学会が学会の活性化に向けて平成18年度より月に1度の研究会が月例会と称してスタートした。しかし、地方の方の参加はなかなか難しいので、そのような点を考慮して地方で分担して開催する方向が打ち出され、東海地方で最初に地方月例研究会を開催した。今までに7回の月例研究会を開催してきたが、平成21年度は3回の月例研究会を開催した。年々研究会は充実、発展し、

分科会の皆さんの学会発表や業績、さらには研究動機や着眼点への発想に貢献している。平成21年度の月例研究会の内容を示すことにする。

(第8回月例会)

日時:平成21年4月18日(土曜日)午後4時～6時30分

場所:愛知工業大学本山キャンパス

内容:第8回日本発育発達学会東海地方月例研究会
メインテーマ:発育発達研究における若手研究者の
頑張り

演題1:「体幹部トレーニングが高齢者の運動能力に及ぼす影響」

演 者:館俊樹先生(静岡産業大学)

演題2:「日韓男子中学生の形態的質の違いに基づく体力の比較・検討」

演 者:田中望先生(愛知工業大学)

特に、今回は若手の研究者に現在取り組んでいる研究の内容を発表してもらった。

(第9回月例会)

日時:平成21年10月10日(土曜日)午後2時30分～6時

場所:愛知工業大学本山キャンパス

内容:第9回日本発育発達学会東海地方月例研究会
メインテーマ:発育発達研究における若手研究者の
頑張り

演題1:「幼児の身体組成とその評価について」

演 者:酒井俊郎先生(浜松学院大学)

演題2:「ナラティブ理論と健康教育」

演 者:安林奈緒美先生(飯田女子短期大学)

演題3:「風雨が走運動時の体温調節および呼吸循環応答に及ぼす影響」

演 者:山本彩未先生(中部大学現代教育学部幼児教育学科)

今回も第8回月例研究会と同様に若手研究者を中心に発表してもらったが、酒井俊郎先生には学位論文を見据えての発表をいただいた。

(第10回月例会)

日時:平成22年2月20日(土曜日)午後1時30分～6時

場所:愛知工業大学本山キャンパス

内容:第10回日本発育発達学会東海地方月例研究会
メインテーマ:様々なスポーツ科学研究への挑戦

演題1:「ラグビーの心理学 -少年ラグビーの心理-」

演 者:高田正義(愛知学院大学)

演題2:「力積を用いた競泳の新しい技術指標の検討」

演 者:山田悟史先生(静岡産業大学)

演題3:「幼児の体力・運動能力の年次変化について」

1969年から40年間の変化-」

演 者:穂丸武臣(名古屋経営短期大学)

今年度最後の月例研究会では、様々なスポーツ分野から活躍されている研究者の方に発表をしていただいた。

以上の月例研究会の延長上に日本体育測定評価学会が平成22年2月下旬に開催され、村瀬智彦先生(愛知大学)は学会理事長として、酒井俊郎先生(浜松学院大学)、春日晃章先生(岐阜大学)はシンポジストとして、松田繁樹先生(岐阜聖徳学園大学)は研究発表で参加され、学会の活性化に貢献された。また、平成22年3月下旬には日本発育発達学会が山梨大学で開催され、穂丸武臣先生(東海体育学会会長)をはじめ、花井忠征先生(東海体育学会理事長)、石垣享先生(愛知県立芸術大学)、酒井俊郎先生(浜松学院大学)、村瀬智彦先生(愛知大学)、正美智子先生(名古屋学芸大学)、斎藤由美先生(名古屋造形大学)、野中壽子先生(名古屋市立大学)、川添公人先生(名古屋経済大学)、春日晃章先生(岐阜大学)、小栗和雄先生、館俊樹先生(静岡産業大学)、中野博貴先生(名古屋学院大学)、田中望先生(愛知工業大学)、山本彩未先生(中部大学)、松田繁樹先生(岐阜聖徳学園大学)、渡辺琢也先生(新城大谷大学)と藤井(愛知工業大学)が参加した。非常に多くの参加者があり、日本発育発達学会も会員数が780名と年々規模が大きくなるようである。今後も月例研究会を企画していく計画である。

謝辞

2008・2009年度の研究交流委員の先生方には、東海体育セミナー・講演会、課題研究におきまして多大なご尽力を賜りました。各行事を無事に終えることができたのも、ご多忙の中お時間を割いていただき、ボランティアで学会活動にご貢献くださいました先生方のお陰です。この場をかりてお礼申し上げます。

2010年度より新体制の研究交流委員会が立ち上がりますが、今後ともご協力、ご鞭撻のほどよろしくお願いいたします。

編集委員会活動報告

編集委員長 吉 田 文 久

I 2009年度 編集委員会活動報告

2009年度の活動は、昨年度に規程の改定を済ませているため、学会誌の審査・編集及び学術奨励賞の候補選出審査が主な活動であった。その詳細は以下の通りである。

〈「東海保健体育科学」誌発刊に向けて〉

- 1.2009年度にスタートした学会誌のWEB化の取り組みの継続から、査読終了論文を速やかに学会HPに掲載することに努めた。
- 2.投稿受付から査読終了までの投稿者・査読者とのやり取りを電子メールで行うことで、審査のための事務手続きを簡素化することで、査読者の協力もあり審査期間も短縮できた。
- 3.印刷屋との校正作業が終了した時点で、HP上の原稿を完成原稿に差し替え、冊子体の発行を待たず、論文の公表ができた。
- 4.今年度の学会誌は、総説1点、原著論文4点の合計5点の論文掲載となり、十分発刊することができる論文数を確保できた。冊子体による学会誌はできれば12月末に発刊したかったが、少し遅れ1月中旬に会員に送付できた。

〈学術奨励賞の候補者選出について〉

- 1.昨年同様、口頭・ポスターの発表に区別なく、候補者の選出審査にあたった。また今年は、審査員を自然科学系と人文社会系に分け、それぞれの分野の発表者の中から1名から2名を受賞候補者として推薦することで審査にあたった。
- 2.審査委員会としては、人文社会系からは推薦できる発表はなく、自然科学系から2点の発表を候補者に推薦することとした。しかしながら、そのうち1名が辞退を申し出たために、最終的に1点の候補者推薦となった。

II 2010年度への引き継ぎ・課題

2009年度の活動の中で検討すべき事項がいくつか見出されたので、それを指摘しておきたい。

〈学会誌編集にかかわって〉

- 1.電子投稿の受付・審査を行い、その広報も行っているが、投稿が予想したほど増えなかった。簡略化や迅速化を図るなど審査の方法や公開の早期化の問題を超えた学会誌の位置づけの検討をしたい。
- 2.これまでの学会誌のPDFへの変換作業を業者に依頼し、学会HP上からの閲覧を可能にしたい。そのために著作権譲渡などの手続きについて早急に検討し、学会誌のWEB化を実行に移したい。

〈学術奨励賞について〉

- 1.最近ポスター発表が増加していることから、ポスター発表に独自の賞を用意するなど、口頭発表とポスター発表を区別して審査することを検討したい。
- 2.学会発表数が多いということもあるが、受賞候補者の選出が自然科学分野に片寄りがちという意見もあり、自然科学分野と人文社会分野との研究スタイルの違いなども確認し、審査方法について検討したい。
- 3.今回は院生の発表が多く、学会大会を盛り上げる大切な要素であることから、今後もその傾向が続くよう何らかの奨励策を検討したい。

〈委員会の組織編成について〉

多様な分野からの投稿に対応できるように、これまでの配慮以上に委員会は分野を拡散してメンバー構成する方向で組織するように依頼したい。

広報委員会活動報告

広報委員長 来 田 享 子

2009年度の広報委員会では、以下の2項目について活動を行った。

- 1.ホームページの管理運営
- 2.東海体育学会会報第82号を2009年6月に刊行した。
刊行にあたり、原稿執筆の労をおとりいただいた会員

等関係者各位、印刷費の援助をいただいた株式会社ミニミニ様に、感謝いたします。

- 3.次期理事会広報委員会への引き継ぎ(会報刊行マニュアルの作成およびレンタルサーバー等管理業務のまとめ)

学会大会委員会活動報告

学会大会委員長 小 林 培 男

1.第57回学会大会の開催

1) 大会の概要

日時:2009年11月7日午前9時から午後7時00分

場所:愛知学院大学日新キャンパス愛知学院大学会館

内容:一般口頭研究発表(14演題)、ポスター研究発表(8演題)、シンポジウム、学会総会(役員選挙を含む)、懇親会、展示

参加者:会員85名、学会顧問3名、当日会員21名、実行委員7名、合計116名

2) 大会の概況と課題

第57回東海体育学会大会が愛知学院大学学院会館ホールにて上記のような概要で開催されました。実行委員会は体育の広い領域を補うよう愛知学院大学心身科学部健康科学科と教養部健康科学教室によって組織され、専門教育と基礎教育機関とが協同して企画運営にあたってくださいました。その成果の一つとして、一般研究発表が14題、ポスター発表が8題であり、参加者合計116名と昨年度の開催概要とほぼ同じ規模での

学会大会の開催となりました。

企画と運営面では、昨年度の三重大会に続き口頭発表会場を1つのホールで行うことによって、あらゆる領域にまたがった体育科学者が一堂に会し、多方面からのアプローチで活発なディスカッションが展開できたと感じています。内容としては、新たな体育学研究のブレイクスルーにも通じる可能性が期待できる研究発表もあり、体育学の魅力を改めて感じる事ができた。その一方で、若手研究者への研究支援を具体的に整理する必要性も感じた。委員会として改めて学会大会抄録集作成要項の見直しをするなどして、より水準が高く、より活発な学会大会を目指したい。

第57回大会の開催にあたり、参加いただいた会員の皆様、大会をご準備していただき見事な運営をしていただきました愛知学院大学の実行委員会およびシンポジスト、座長、協賛者(団体)など大会関係者の全ての皆様に深謝いたします。

東海体育学会第57回大会を終えて

東海体育学会第57回大会は、平成21年11月7日(土)、愛知学院大学日進キャンパス学院会館ホールにおいて開催されました。本学で開催されるのは第25回大会(昭和52年)以来のことで、32年ぶりということもあり、私共実行委員会委員が総力を挙げて大会の準備を進めて参りました。実行委員会は愛知学院大学心身科学部健康科学科と教養部スポーツ科学教室の教員によって組織され、専門教育と基礎教育機関が協同し企画運営にあたりました。全体的な学会運営につきましては、前回(第56回大会)三重大学で行われた内容を参考にし、ポスター発表を取り入れ、口頭発表会場を1つのホールで行うようにさせていただきました。

参加・発表申込や抄録原稿の受付は、愛知学院大学内に開設した大会事務局で行うとともに、東海体育学会のホームページからも行えるようにし、実施要綱や申込期日、大会抄録集の訂正などを迅速に行うことができるように努めました。シンポジウムでは、体育・スポーツの社会貢献に関する内容について取り上げ、大学・公益法人・プロスポーツ・民間といったそれぞれ異なる4つの視点から考えることができるように企画いたしました。

当日、参加者は、学会会員85名、顧問3名、当日会員21名、実行委員7名の合計116名と多くの方々に参加していただきました。

一般研究発表は、口頭発表が14題、ポスター発表が8題の計22題の演題を受付、バイオメカニクス4、運動生理学2、発育発達6、体育科教育学4、体育方法1、健康づくり3、測定評価1、体育社会学1という演題数でした。このように本学会大会では、多くの研究領域の体育科学者が一堂に会すことで、多方面からのディスカッションが展開されることが特徴として挙げられます。研究発表の中には、今後の発展が期待される研究発表もみられ

学会実行委員長 佐藤 祐造(愛知学院大学)

ました。ただその一方で、方法論や研究手順において不十分な点のある研究も見受けられました。このようなことを踏まえ、若手研究者の育成に力を入れるためにも、若手研究者の育成支援方法について具体的に整理する必要性も感じました。今後さらに体育科学研究や本学会の飛躍に期待したいと思います。なお、口頭発表、ポスター発表ともに発表の進行については、座長をお引き受けいただいた先生方のご協力により、滞りなく活発な議論がなされました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

シンポジウムは、「体育・スポーツが地域・社会に果たす役割」と題して開催されました。座長は私が担当し、大学から内藤正和氏(愛知学院大学)、公益法人から和田昌樹氏(愛知県健康づくり振興事業団)、総合型地域スポーツクラブから榊原孝彦氏(NPO法人ソシオ成岩スポーツクラブ)、プロスポーツから松永諭氏(名古屋グランパスエイト)がそれぞれの立場から具体的な取り組み方法や、今後の目標・構想についてご講演していただきました。また、その後の総合討論においても会場との活発なディスカッションが交わされました。

一般研究発表・シンポジウム終了後には、学会会場内の2階にあるレストランにて40余名の参加者を得て、懇親会が開催されました。会場は日進キャンパス内を見渡すことができる高台にあり、学内の夜景を見ながらの懇親会は参加者に好評だったように感じました。

最後に、本学会大会の開催にあたり、多くの方々・企業・団体から有償・無償のご協力を頂戴致しました。また、学会本部事務局、本学教職員および本学大学院生、学生など関係各位のご協力に対し、心から御礼申し上げます。

次回の第58回大会の成功を心よりお祈り申し上げます。

東海体育学会第57回大会見聞録

東海体育学会第57回学会大会傍聴記

学会大会委員長 小林 培 男

第57回東海体育学会大会が愛知学院大学日進キャンパスで開催された。昨年の秋に実行委員会が心身科学部健康科学科と教養部健康科学教室によって組織され、大会が準備されてきた。

昨年の第56回三重大学での大会から新たにポスター発表が加えられ、本大会でもこれを踏襲すると共に一般口頭発表を同一会場で実施した。研究発表を1つの会場で行うことによって、異なる領域にまたがった体育スポーツ関係者が多方面からのアプローチも見られ活発なディスカッションが展開できた。一方、学会大会抄録の記載、方法や研究結果と考察の問題に関する研究方法論についての指摘もあり、より一層綿密な研究計画と考察が求められた場面も見受けられた。

午後6時を回る中、ポスター資料の前で熱心な論議や情報交換が進み、今年度のすべての学会大会の企画が終了した。引き続き実行委員会を中心に参加者とともに懇親会が催された。大会実行委員会の労をねぎらい、研究発表と共に有意義な交流と懇親ができた。

学会大会委員会として本大会の企画運営にご尽力頂きました委員長佐藤祐造教授はじめ愛知学院大学実行委員会の皆様、研究を取りまとめ進めいただきました座長や司会者の皆様、貴重なる研究と発言を提供していただきました一般研究発表者の皆様、シンポジストの皆様に心から感謝申し上げます。

以下に座長の先生方から頂いた本大会の研究発表概要とその要旨を報告します。(委員長 小林培男)

1. シンポジウムの概要と成果

この度の第57回東海体育学会大会のシンポジウムテーマは実行委員長でもある愛知学院大学心身科学部佐藤祐造教授の取りまとめと司会で「体育・スポーツが地域・社会に果たす役割」と題して開催した。シンポジストは、大学から内藤正和氏(愛知学院大学)、公益法人から和田昌樹氏(愛知県健康づくり振興事業団)、総合型地域スポーツクラブから榊原孝彦氏(NPO法人ソシオ成岩スポーツクラブ)、プロスポーツから松永諭氏(名古屋グランパスエイト)といった立場からそれぞれの取り組

みについてご講演をいただいた。

その成果の一つとして、それぞれがどのような取り組みを行っているのか、具体的な取り組み方法や目標(夢)について知ることができ、総合討論も活発なディスカッションが交わされた。今後、それぞれが不足している部分を補い合い、さらにより効果的に地域や社会に対して活動できればと感じた。(愛知学院大学 水藤弘吏)

2. 一般研究発表の概要と成果

K1、K2、K3:口頭発表【バイオメカニクス分野】

今回の大会でバイオメカニクスの分野の発表は合計4演題あり、その内3演題が口頭発表であった。演者は最初の2人が東海学園大学の岡本敦氏と上越教育大学の市川真澄氏のベテラン会員の発表であった。岡本会員の発表は砲丸投げの投射角の指導に関するもので、古くから言われてきた、投擲物の重量が大きい場合の人が加える力の方向と投射角が大きすぎることに着目し、どのように指導するかを論じたものである。市川氏の発表はスノーボードターンにおける脚の屈伸運動とエッジング角、荷重の関係についての基礎的研究である。スノーボードではスキーと異なり横向きに滑るため、つま先側(前面)へのターンと踵側(背面)へのターンにおいて、エッジングや荷重の動作が全く異なることに着目し指導法への資料を得ようとしたものである。3題目は若手会員の中京大学の木村健二氏の発表で、サッカーなどに見られる高速の切り返し動作(sidestepping)中の膝関節の動きを調べたものである。従来の動作分析のように、膝を屈曲進展のみの1自由度の関節としてではなく、障害発生の観点から、膝関節の動きを大腿と下腿の相対的動きとして6自由度で捉えようとしたものである。(名古屋大学 池上康男)

K4、K5:口頭発表【発育発達・運動生理学分野】

演題K-4:プロサッカー選手にみられる下肢骨格筋の特徴的な発達がどの年齢段階で生じるか確かめようとして、中学1年生のサッカー選手を対象に検討した。この結果、この年齢ですでにプロ選手と同等の適応がみられ、

スプリント能力に影響することを認めた。本発表は専門的なサッカートレーニングの開始を考える上で参考となる。演題K-5:最近、心循環系機能改善目標の一つとして血管拡張機能の向上が注目され、身体活動が効果的なことから運動の種類や強度について検討されている。藤田たちは運動だけでなく、これに低酸素刺激を加えることにより血管拡張能がより促進される可能性を報告した。(豊田工業大学 齊藤満)

K6、K7、K8、K9、K10:口頭発表【体育科教育学・体育方法分野】

このセッションでは、これまでほとんど発表がなかった体育科教育学の分野から4点及び体育方法学分野から1点の発表がされた。特に前者は現場教師の実践報告、大学院生の修論の中間報告と思われる内容であったが、体育科教育学の研究の一端を参加者に紹介し、研究分野の理解につながるという点で成果はあったと思われるものの、発表のどれもが研究の基本的な手続きの検討が不十分であり、フロアから研究の方法から内容、結果に関わってその「根拠」を問う質問が寄せられた。併せてフロアから抄録の記載方法など基本的な発表準備の問題も指摘があった。発表者には今回の経験を教訓としていただき、学会としては今後の学会における発表手続きについての検討が求められる。(日本福祉大学 吉田文久)

K11、K12、K13、K14:口頭発表【健康づくり・測定評価分野】

最初の2題は、生活習慣指導による健康改善効果を検討した研究でした。残念ながら両演題ともに著名な改善効果は得られなかったようでしたが、逆に生活習慣指導の問題点が浮き彫りとなり、今後の研究の方向性が示唆されました。3題目は小学生の休み時間の過ごし方についての調査結果でした。休み時間には積極的に身体を動かして欲しいという発表者の思いは理解できましたが、具体的な対策については今後の検討課題に留まっていました。最後はサッカーJリーグチームに対するニーズに関する研究でした。私にとりましては新鮮な発想の研究でしたが、スポーツの社会貢献を考える場合は、こういった研究も必要だということが理解できました。どの演題にもフロアからも活発な質問や意見があり、有意義なセッションでした(愛知学院大学 大澤功)

P1、P2、P3、P4:ポスター発表【発育発達分野】

ポスター発表は、ポスターの前で発表時間3分とし、質疑応答は全体終了後に各自のポスターの前で行うこととした。3分の持ち時間の中で目的、方法、結果、考察を簡潔に述べることはかなり難しく、途中で終了となった発表者もいた。また、3分の時点でちょうど終了した発表者には拍手がわき起こった。発表内容はP1では男子中学生の3年間の形態および体組成の変化と体力との関連から、握力、立ち幅とびの能力は身長および筋肉量の変化に依存することや体脂肪の増加は走能力の低下に関わることが示された。他の3題は韓国女性を対象とした研究で、P2では中学生のBMIの判定から分類した痩身タイプの20mシャトルランで有意差が示された。また、P4ではBMIの判定から分類した標準タイプで、脂肪過少群が20mシャトルラン、上体起こし、腕立て伏せで優位に優れていたことが示された。P3では韓国一般女性を対象とした研究から低身長タイプに初経遅延が多いことが示された。全体の発表を終えた後は活発に討論がなされた。(南山大学 池上久子)

P5、P6、P7、P8:ポスター発表【運動生理学・バイオメカニクス・体育社会学分野】

このセッションのポスター発表は、運動生理が2題、バイオメカニクスが1題、体育社会学が1題であった。運動生理では自律神経に関する内容、筋横断面積と骨強度との関係について、バイオメカニクスでは人工芝に関する力学的指標について、体育社会学では運動教室の実践例についてご発表していただきました。発表時間が3分と、短い時間の中で先生方には内容を簡潔に述べていただきました。成果としましては、ヒトの生理的応答から人工物、実践例に至るまでの研究について知見を得ることができました。個人的には、自律神経系に関する筋肉痛の影響について興味を惹かれ、関心深く発表内容を拝聴いたしました。(愛知学院大学 水藤弘吏)



第57回大会のポスター発表後の自由討論の様子

東海体育学会第58回大会のご案内

実行委員長 飯 本 雄 二 (至学館大学)

東海体育学会第58回大会は、平成22年10月31日(日)、至学館大学(愛知県大府市横根町名高山55:旧校名中京女子大学)において開催することとなりました。会場は、JR東海「大府駅」からスクールバスで約10分です。発表形式は、口頭発表とポスター発表とがあります。なお、発表申込締切は、8月25日(水)とさせていただきますのでよろしくお願い申し上げます。

また、この大会では「スポーツ栄養最前線」と題したシンポジウムをプログラムに加えました。このシンポジウムは、「スポーツと栄養」に関わる分野において活躍されている方をお招きし、体育・スポーツの指導現場に役立つような情報提供の場にしたいと考えております。なお、シンポジウムは一般公開とさせていただきます。

至学館大学の実行委員会は、皆様のご期待に沿うべく、最大の努力で準備を進めております。何卒、一人でも多くの会員の皆様ご参加くださいますよう心よりお待ちしております。

東海体育学会第58回大会開催概要

【期日】

平成22年10月31日(日曜日) 受付午前9時開始

【会場】

至学館大学 9000号館(アジア棟)

【内容】

一般研究発表・シンポジウム

【参加申し込み】

学会員はどなたでも事前申し込み無しで参加できます

【発表申込締切】

2010年8月25日(学会ホームページの申込用紙をご利用ください)

【抄録提出締切】

2010年8月25日(詳細は学会ホームページもしくは会報をご覧ください)

※抄録は学会ホームページ掲載の「抄録フォーマット」を使用して作成してください。

【大会事務局】

東海体育学会第58回大会事務局(事務局長 高橋 淳一郎)

〒474-8651 愛知県大府市横根町名高山55 至学館大学

学会ホームページ <http://www.tspe.jp>

電話・ファックス 0562-46-1291・0562-44-1373

交通アクセス <http://www.sgk.ac.jp/access/index.html>

(JR東海「大府駅」からのスクールバスは朝8時30分から運行いたします)

東海体育学会第58回大会演題募集要項

実行委員長 飯 本 雄 二 (至学館大学)

【発表申込】

一般研究発表希望者は、東海体育学会ホームページ<http://www.tspe.jp>の「学会大会一般研究申込用紙(EX専用フォーマット)」をダウンロードし、必要事項を記入の上、本大会事務局へ電子メールに添付して平成22年8月25日(水曜日)必着で申し込みください。

【発表資格】

演者および共同研究者は、東海体育学会会員^{*}で平成22年度会費を納入した会員です。但し、本学会員以外の者を特別共同研究者として発表に加える必要のある時は、「特別共同研究者の登録」(日本体育学会規定に準ずる)が必要となりますので、申込期日までに学会事務局へ連絡の上、必要な手続きをしてください(※日本体育学会の他支部の会員は特別共同研究者扱いになります)。

演者としての演題登録は、会員1名につき1演題に限ります。共同研究者としての演題登録は何演題でも差し支えありません。

【発表方法】

口頭発表およびポスター発表

【発表時間】

口頭発表は発表時間15分(質疑応答時間5分)、ポスター発表は3分(質疑応答は発表終了後自由討論)で行います。

【発表形式】

口頭発表ではパソコンプロジェクターおよび資料によって行います。資料を用いる場合は、各自で100部程度を準備してください。ポスター発表では、縦180cm、横90cmのボードを使用して所定の時間帯に掲示してください。

【抄録作成】

抄録の作成は、東海体育学会ホームページ<http://www.tspe.jp>に掲載されている「抄録フォーマット」を用いて、A4縦置き1ページ以内で作成してください。「抄録フォーマット」に記載された指示に適合しない抄録は原則として採択いたしません。

作成した原稿は電子メールに添付し、下記の大会事務局へ平成22年8月25日(水曜日)必着で提出してください。

【その他】

東海体育学会学術奨励賞は、本大会において発表された一般研究発表の中から選考します。

【問い合わせおよび申込先】

東海体育学会第58回大会事務局(事務局長 高橋 淳一郎)

所在地住所 〒474-8651 愛知県大府市横根町名高山55 至学館大学

電話番号 0562-46-1291

FAX番号 0562-44-1371

Email 58-tspe@sgk.ac.jp

学術奨励賞を受賞して

星 川 佳 広 (浜松ホトニクス株式会社)

歴史ある賞を頂戴し大変感激する次第です。評価して下さった審査員、査読の先生方に心から御礼申し上げます。

研究内容は、サッカー選手の筋の発育発達の様相を、中学生(13歳)からプロ選手までを対象として、横断的、縦断的に観察してつなげたものです。被検者は合計で約400名、5年にわたる縦断的追跡を行っています。今回は私のみが表彰されましたが、もちろんこの大がかりな研究は私一人で行いえたものではありません。選手、指導者のご協力に感謝するとともに、研究をともに行った会社の同僚(飯田朝美さん、村松正隆君、井伊希美さん、内山亜希子さん)、上司の中嶋由晴主任と受賞を共有したいと思います。

中学からプロサッカー選手までをつなぐのに10年の年月がかかっています。私どもの活動は、スポーツ選手を動物にたとえるのは良くありませんが、野生の動物に近づき、警戒感を取り除き、信頼を得て、その生態を探るのに似ているかなと思います。当然ながら動物園で飼われた動物からデータを得るのは勝手が違います。手続きのにも、時間的にもこちらが思うようにいかないことは非常に多く、一方で研究者側が先走ってしまうと信頼関係は簡単に壊れてしまうものだと思います。

私はこの手のスポーツ科学的サポートが途中で頓挫する経験、指導現場で受け入れられない経験をいくつかしています。その経験から、本研究では測定屋として観察に徹することを心がけました。選手に余計なことを言わないこと。一方で、指導者には説明責任を十二分に行うこと、測定は100%1回で終了すること(実際には

なかなか100%とはいかないのですが。。。)、報告を迅速にすること、測定を快適にすること、測定精度を高めること、等々です。これらが完璧にできたとはいえませんが、結果的にそう心がけたことが長く続けられた要因で、多くの本物のスポーツ選手のデータが得られた要因になったと振り返ります。

こういった背景のあるデータは私たちにとっては1つ1つが珠玉であります。しかし実を明かすと、上位団体である「体育学研究」へ投稿した論文は何度もリジェクトを受けその都度かなりへこたれました。私としては、選手、指導者と信頼関係を構築する作業も体育・スポーツ科学研究の重要な手続きの一部だと思いたい。論文にしようとなかなかその部分を査読者に伝えられませんでした。それだけに、今回論文としてこれまでの成果を発表できたこと、その伝えにくい部分を汲んで評価していただいたことに大変感謝する次第です。これまでの取り組みが評価されたようで非常に励まされる思いがします。

おそらく何もかも思い通りに行く研究など無いだろうと思います。弱きものや普通のものでなく強きものが競争する部分を研究できるのは、体育・スポーツ科学の研究者として最も醍醐味あるところと幸せにも思います。受賞を期にさらに精進したいと思います。誠にありがとうございました。



在外研修報告I

フロリダの熱い太陽の下での在外研究 ーフロリダ大学でのサバティカルを終えてー

秋 間 広(名古屋大学総合保健体育科学センター)

○はじめに

2009年4月から2010年3月までの1年間、University of Florida, Department of Physical TherapyのDr. Vandenborne(以下、Dr.V)という女性研究者のラボで在外研究をする機会を得ました。フロリダ大学はフロリダ州の北部にあるGainesville市という典型的な大学町にあります。フットボールはトップクラスで、2006年と2008年は全米で優勝、また昨年度は3位でした。大学のマスコットはゲーター(アリゲーター)で、大学内にもアリゲーターがいるほどで、この地ではポピュラーな生き物なのです(写真1)。今回の在外研究は名古屋大学の特別研究期間(サバティカル)の制度を利用したものでした。海外での在外研究は、東京大学で助手をしていた時に、文部省若手在外研究員で1年間米国(University of Georgia, Department of Exercise Science)で在外研究をしたのを含めて2度目となります。本稿が、今後海外で研究してみたいと思っている院生の皆さんや若手研究者の皆さんにとって、少しでも有益な情報となればと願っております。



写真1:フロリダ大学内に生息する野生のアリゲーター

○留学先の決定からVISA申請

留学先をどこにするのかということは、海外留学において最も重要な事柄となります。今回は次のように受け入れ先をしまって行きました。私の専門分野である運動生理学の論文でよく参考にするのはアメリカの研究者でした。また、10年前に在外研究を一度経験しており、アメリカの社会システムがある程度理解できていたので、滞在する国としてはアメリカと決めました。次は研究内

容について検討しました。受け入れ研究機関を選択する際、大きく分けて2つの選択肢がありました。一つは、興味のある研究テーマを扱っているが、日本では研究していないあるいは研究することができないラボに滞在するパターン、もう一つは今の自分の研究の流れと同じような研究内容の研究者のラボに滞在するパターン。結論から言うと後者を選びました。最初は前者の方を選んでいて、オハイオ州のある研究所の研究者と数年前から連絡をとって受け入れ許可をもらっていたのですが、渡航をする数ヶ月前にある避けられない事情が発生してしまい、断念しました。急遽上記のDr.Vに連絡をとって受け入れてもらえることとなりました。

もし皆さんが海外で長期の研究生活(大学院への入学ではなく、共同研究をすること)を送りたいと考えている場合、留学資金を持っているのかどうか大きなポイントになります。資金を持っているのであれば、余程の理由がない限り拒む理由はないと思います。また、博士号を持っていることは必須と思われます。さらに英文誌の論文を何本か持っていることも必要になると思います。場合によっては、受け入れ先の教授がその論文誌を読むことによって、許可するかどうかを決める判断材料となり得るからです。受け入れる側としては、無給でラボに貢献してくれるのであれば、拒む必要はないと個人的には考えておりますが、受け入れるか否かはボスの考えやラボの状況にも左右されるかもしれません。

当然ですが、そのラボを選ぶには事前にラボのアクティビティーを知る必要があります。それには、論文がどれだけどんな雑誌に掲載されているのかを知らなければなりません。また、そのラボで研究費がどのくらいあるのかも、研究をする上では重要となります。そういう意味からすると、Dr.Vのラボは、正直に言うところと発表論文に関しては少し物足りない感じがしました。しかし、渡航までに期日が迫っていること、他に思い当たる研究室が見つからなかったことから、Dr.Vにコンタクトをとることとしました。彼女の名前はもちろん知っていましたが、個人的な面識はありませんでした。1回目の在外研究をしていた受け入れ教授のDr.DudleyとDr.Vが共同研究をしていて

面識があること、また当時Dr.Dudleyの院生だったChrisが現在Dr.VのResearch Assistant Professorをしていることなどの共通の話題をメールに添えました。もちろんこのメールには、こちらの希望する滞在期間で受け入れ可能かどうかということ、簡単な履歴と研究業績を添えております。このメールを送ったのが渡航予定日の約4ヶ月前で、2、3日のうちにすぐに受け入れ許可の返事が来ました。

次はVISAの申請に必要な書類のための手続きです。これは事務とのやり取りになります。VISA申請にはフロリダ大学が発行する公式な受け入れ許可の書類(DS-2019)が必要です。フロリダ大学の事務では、他大学では2、3ヶ月かかると言われているこの手続きを2週間ほどでやってきて、非常に段取りよくVISA申請までこぎ着けました。基本的にアメリカの事務手続きには、非常に時間がかかります。その原因の一つに事務職員の事務能力の低さがあります。日本の事務職員の方々は、能力が高いことが再確認できます。しかし、私の書類を担当してくれたDanielleという女性事務員は非常に有能な人で、滞在中に有能な事務職員として表彰されていたのを広報誌で偶然見つけました。これで彼女の素早い対応の理由を知ることができたわけです。その後、VISAの発行は問題なく行われ、本人には在外研究者用のJ1というVISAが、同行する家族(妻と子供2人)にはJ2というVISAが発行されました。

○Dr.Vラボでの研究内容

Dr.Vラボでの研究は骨格筋に焦点が当てられており、磁気共鳴画像(MRI)を使った画像分析や磁気共鳴スペクトロスコピーを使った筋代謝などの研究が行われています(写真2、3)。具体的な研究内容としては、1)デュシェンヌ型筋ジストロフィー(DMD)の研究、2)骨折後のギプス固定に伴う筋機能・形態の研究、3)脊髄損傷患者の筋機能・形態に関する研究の3つで、それぞれがヒ



写真2:Dr.Vandenborneラボの集合写真

トと動物を対象にするものに分かれて実験が行われています。渡航前は2)の研究内容をヒトを使ってやりたいと思っていたのですが、患者を集めるのに時間がかかるという大きな問題があり、滞在期間が限られているため断念せざるを得ませんでした。結局、Dr.Vからの勧めもあって現在ラボで中心的に進められているDMDの研究をすることとなりました。



写真3:Dr.Vandenborne(真中)、Dr.Walter(右)と著者(左)
なお、Dr.WalterはDepartment of Physiology & Functional Genomicsの准教授でDr.Vandenborneとは夫婦

このDMDとは3500人に一人の割合で男児のみに発症するジストロフィン遺伝子欠損が原因の進行型筋ジストロフィーで、10歳代前半より筋萎縮と筋内脂肪の増加が同時に起こり、20歳代までに呼吸器系の不全で死に至る病気です。現在でも有効な治療方法は見つかりません。DMD研究に関する当初の感想としては、運動生理学とはあまり関係ないので、興味を持てないというものでした。しかし、筋萎縮が起こることや筋内脂肪が増えることなど、日本で興味を持っていた内容との類似点も見つかり、研究を進めるうちに徐々に興味を持てるようになってきました。

この研究をやると決めた時点より、これまで日本で研究していたバックグラウンドを応用して、何か新しい試みをしないとイケないのでは……と漠然と考えていました。そして、何をしたら研究として自分自身はもちろんのこと、ラボのみんな、Dr.Vや関連の研究者に興味を持ってもらえるのかを考えました。そのためにはこのDMDという自分自身ではよく分からない病気のことを理解する必要があります。

DMDは病気の進行にともなって、筋の内部に筋内脂肪が増えてきて、いわゆる“霜降り肉”状態となってきます(写真4)。運動生理学の本に記載されているように、筋機能は基本的には筋量に依存するので、筋と脂肪の面積を定量化できたらDMD患者の筋機能をより詳しく理解でき、臨床場面にも応用できるであろうと考えました。健康な人を対象にして、筋内脂肪と筋組織を分類して

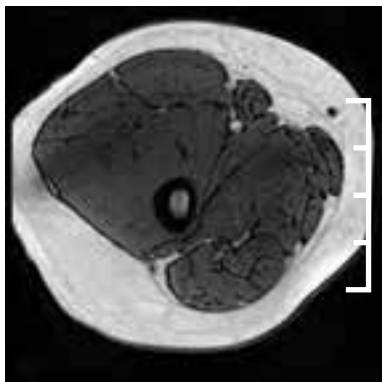
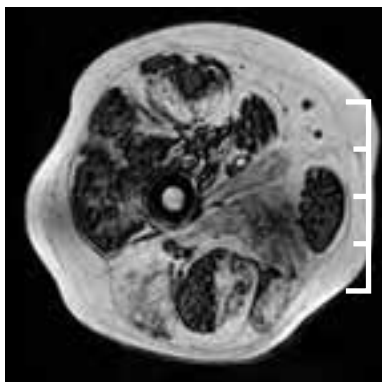


写真4:デュシェンヌ型筋ジストロフィー患者(10歳)の右大腿部のMRI(上)
健康な男児の右大腿部のMRI(下)

いる先行研究は、3つほどあったのですが、病気の筋を対象としたものではありませんでした。したがって、この方法を確立する必要がありました。この分離方法を確立するのにかなり時間を割きました。ラボミーティングで何度か発表をして、ラボのメンバーから色々意見もらいながら徐々に良い方向へ向かっていきました。結果的には先行研究の方法を自分なりに問題点を少し改善して、共同研究者やDr.Vも納得してもらえるような手法が確立できたと思っています。Dr.Vからはこの手法の確立に対して大変に良い評価をもらい、今後はこの手法の妥当性を確認したり、この手法を使って色々なことを試していくとのことようです。そして、大腿部を構成する筋毎に筋と脂肪の面積(相対値と絶対値)を求めて、様々な機能テスト(筋力、椅子から立ち上がるのに要する時間など)との相関関係から、どの筋での筋量や筋内脂肪量がどんな機能に関与しているのか等について検討しました(写真5)。今回の滞在の最終目標は、こちらで得たデータをまとめて論文の投稿することでした。滞りが終わる2週間ほど前に最終原稿を完成させ、帰国直前まで共同研究者による内容のチェックや英文のチェックを受け、現在はまた別の研究者のチェックを受けている状態です。したがって、目標はほぼ達成できたと考えています。そのチェックができ次第、Neuromuscular Disorderという雑誌に投稿する予定であります。



写真5:健康な男児(10歳)のMRIの測定風景(上)
等尺性膝伸筋力の測定風景(下)

○アメリカでの生活と家族

滞在場所は違えど、10年ぶりにアメリカでの1年間の生活が再開できることを渡航前より大変に楽しみにしておりました。10年前、長女は8ヶ月の赤ん坊でしたが、今回は現地校であるJ.J.Finley Elementary Schoolと9月の新学期からはWestwood Middle Schoolに通いました。一方、長男は10年前には生まれておらず、初めてのアメリカ生活となりました。彼もJ.J.Finley Elementary Schoolに1年間通いました。英語がほとんど理解できない子供たちが楽しく学校生活を過ごせるのか?などと色々心配しましたが、親の心配をよそに子供たちはとても楽しい学校生活を送ることができました。

子供たちは英語がしゃべれない子供たちのためのプログラムであるESOL (English for speakers of other languages) のシステムが充実した学校に通うことができたので、最初と比べると子供たちの英語の能力は飛躍的に向上しました。また、日本の小学校との違いも多々あったようです。例えば、先生は全員非常にやさしいこと、授業中におなかがすいたらスナック菓子などを食べてもいいこと、ランチタイムには希望すれば親と一緒にランチをとっていいことなど、数えきれないほどたくさんあります。また、長女は9月の新学期からMiddle Schoolに通うこととなり、最も楽しいことは学校へ行くことといつも言っているほどでした。ESOLの先生であるMs.Oyonarteに憧れ、

将来は学校の先生になりたいと言い出し始めたほどです。

日本の文化とアメリカの文化の違いを体験することによって、それぞれの国の文化の良さや悪さを子供たちなりに知ることができ、日本を客観的に見つめることができる非常にいい機会であったと思っています。

○在外研究と滞在費用

この東海体育学会に所属する学会員の皆さんの中にも、博士号をとって海外でポスドクをしたいと考えている若い研究者もいるであろうし、海外で研究生活をしたと思っている若手教員の人もいるでしょう。しかし、それを実現するには金銭的な負担が伴うことも事実です。また、どの国に行くのか、生活費の財源はどうするのか、家族と一緒にそれとも一人でいくのか、どんなアパートに住むのか、車を所有するのかどうか・・・など人によって条件は違うと思います。ただ、一概に言えることは初期費用や旅費などを合わせて、数十万から数百万円単位の準備資金が必要であろうということです。私の場合は家族4人で行ったので、数百万円の初期費用が必要でした。帰国前に先行投資した車や家財道具等売り払うにしても、やはり生活基盤を整えるために一定金額の費用が必要になります。そのような出費があることを十分に考慮して、必要なら予め財源を確保して渡航する必要があります。政府の海外派遣プログラムや特定の財団

あるいは受け入れ先から旅費や生活費が支給される場合を除き、かつて私も経験した文部省在外研究員のような潤沢な旅費・滞在費の元での在外研究は不可能となってきているのが現実かと思います。

○最後に

1年間の在外研究を終えて感じたことは、1年というのは長いようで実は非常に短いということです。あつと言う間に数ヶ月がすぐに過ぎてしまいますので、ラボの状態をできるだけ早く把握して自分の在外研究のゴールを早めに設定して、それを目指して計画的に研究や実験をする必要があるかと思います。また、最近では海外で研究生活を送ることは珍しいことでなくなって来たので、行くこと自体が目的ではなくて、どんなことをやってきたのかが問われる時代が来ていると思います。そして最も大切なのはその研究成果を研究論文として公にすることだと考えます。これが最も効率的でまた目に見える海外研修の成果の還元方法で、快く受け入れてくれたラボへの恩返しになると思います。

最後になりましたが、在外研究報告の場を与えて頂きました東海体育学会に深謝いたします。また、本学会に所属する若い研究者が、国際的に活躍できるような機会が今後益々増えることを切に望んでおります。

在外研修報告Ⅱ

サバティカル研修報告 ～オークランド大学教育学部滞在記～

合 屋 十四秋(愛知教育大学 教育学部 保健体育講座)

2008年から2009年にかけて、学究生活のまとめとリフレッシュ&体力回復のため、思い切って1年間のサバティカル休暇を取りました。その間、後半の2009年4月～8月下旬までの約5ヶ月間、New Zealandオークランド大学(University of Auckland:U of A)教育学部保健体育(PE)で、水中安全および水泳の指導実践などに長年従事されているDr.Kevin Moran氏と共同研究を行うことができました。また、2010年3月にも10日間の研究打ち合わせで行ってきました。

1) はじめての南半球での生活

オークランドはNZの北島に位置し、市街地は北のワイテマタ湾と、南のマヌカウ湾に跨る地峡地帯。穏やかで

美しい海岸線に恵まれています。この地域はNZの総人口(430万人)の1/3の140万人の最大都市圏です。日本と同じ火山国のため、変化に富んだ自然が多く残っており、丘陵地帯にはヒツジと牛の牧場が多く見られます。そのため人間の数より多いと言われますが、





まさにその通りです。また、Outdoor Sportsに適したフィールドが多様であり、学校教育のカリキュラムにも取り入れられています。その自然保護には国家レベルでの対策が講じられています(DOC:Dept of Conservation)。市街からは“City of Sails”と呼ばれるHarbourが一望できます。ヨットのAmerica's Cupの舞台としても有名です。温暖な亜熱帯性気候のため、大変過ごしやすく、冬に雪は降りません。今回の滞在期間中は季節が日本とは逆で、初秋から冬。一番悪い時期に来たと言われました。冷たい雨の日が多くありました。また、北と南が逆になり、日当たりのよい北向きの部屋?となります。



U of AはCity、Epsom、Tamaki Campusの3つに分散し、教育学部はEpsomにあります。Cityからバスで西に15分。2004年、旧オークランド教育大学(Auckland College of Education)はオークランド大学教育学部に発展的に吸収合併され、Critical Study in Education(複合領域:教育学、社会科学、保健体育、太平洋地域教育)となっています。皆クリスティと呼んでいます。NZは南太平洋系、東洋系、中近東系の移民などに積極的であり、この大学も多様な人種のルツボです。先住民はマオリ族と言われる南太平洋から入植した人達ですが、19世紀以降、英国系の人達が多くを占め、場所によってはビクトリア調の面影を残す建物が見られます。公用語は英語とマオリ語。教育システムも2通り。学生の教育実習も一般校とマオリの両方を必修としています。ここオークランドでは色んな国の人達とすれ違い、今まで聞い

たことのない言語が飛び交います。従って、食文化も非常にバラエティに富み、中華、韓国、東南アジア、インド、中近東、ポリネシアンなど食材も豊富で、日本食品も手に入ります。驚いたことに魚を生で食べる人達が多く、魚屋には切り身の刺身が売っており、新鮮でおいしい鯛、マグロ、フェダイなどが手に入ります。ほぼ日本と同じ食生活ができるので大変重宝しました。当然のことながら、これに合うビンテージもののワインがスーパーマーケットで廉価で手に入ります。また、日本で高価なトロピカルフルーツのフィジョア(Feijoa)も一般家庭の庭先で採れます。アパートはCity Campusの直ぐ近く。僅か5分も歩けば大きな公園、Auckland Domainがあります。市街地から少し入っただけで静寂の森の中にすっぽりと入り、元火口が広いフィールドになっていて、寝ころんで本を読む人もあれば、ジョギングやお年寄の散歩まで様々です。特に、週末は家族連れでノンビリ過ごしたり、タッチフットボールのクラブチームがあちこちで練習や試合をやっています。



2) サバティカル&共同研究

Dr. Kevin Moran氏はOpen Water Safety、Drowning Prevention、Surf Life Savingなど、プール以外の海や川などでの水中安全、溺れないためのノウハウ、サーフボードでの救助法などの理論と実践研究を専門とされています。オーストラリアでもOpen waterでのこのような活動や実践が行われています。それに比べ日本では、泳ぐフォームをよくすることと、サバイバルテ



クニツクの違いが明確になされていません。「泳げることよりも溺れないこと」を大切にする文化の違いなのでしょうか?それとも教育内容のとらえ方の違いなのでしょうか? Kevinは40年来Surf Life Savingに携わり、大学の教員になったスペシャリストですが、彼はメキシコオリンピック(1968年)の自由形の選手だったそうです。バタフライの長澤、平泳ぎの鶴峯各氏の名前を知っていました。NZ到着翌日には、彼の水泳の授業を早速拝見してもらいました。屋外25mプールですが、夏でも最高気温が25℃位なのでボイラーで温水にしています。

授業終了後、U of Aは本学との学術交流協定校でもあるので、学科長、学部長との表敬訪問を含め、学生・院生・教職員のさらなる交流、サバティカル中の研究計画(Can Swim Project)などについて話し合うことができました。昨年の11月には私が会長を務めている日本水



泳水中運動学会にKevinを演者として招き、Building a Water Safety Culture(水中安全文化の構築)と題する水難事故防止策の法令や教育について、また、その介入効果や水難リスクの認識が実際の程度社会に浸透しているかをNZの現状を例にして話題提供いただきました。氏の水中安全文化とは、水難事故や溺れることを未然に防ぐ信念、態度、価値観および行動をみんなで共有する教育であるという考え方に感銘を受けた会員は多かったように思います。今後プロジェクトとしてU.S.A、Australia、Norway、Korea、Japanなどとの国際比較を今年の6月Osloで開催されるBiomechanics and Medicine in Swimming学会でWork Shopを開くまでになり、研究成果の一環として今後も継続して行きたいと思っています。

3) Marine Rescue Center & WAI & 水泳教育

5月のある日、オークランド港にあるMarine Rescue Centerに行ってきました。ここでは、1) Surf Life Saving、2) Coast Gard、3) Harbour Master、4) Police/ Helicopter Rescueが一カ所に集中され、センターの中



央管理棟には人的配置、監視システム、無線オンライン(1~4のすべて)による、中央コントロールシステムを稼働させる体制が整っていました。ここへ連れて行ってもらったKevinが言うには、このようなセンターはアメリカ、オーストラリアなどにもなく世界で一つではないかと自慢していました。特に、夏のシーズンでは事故、遭難状況の情報を一手に集め、最も適した救助、救済方法を中央コントロールシステムで制御し、実働できるようにしています。また、大学医学部の病院にはヘリポートがあり、センターからわずか数秒で到着できます。海の潮汐表、アメダス、北島北部の各ビーチや港湾連絡先のモニター表示、出動体制管理システム(24時間体制:警察、ヘリ、サーフライフセービング要員)などお互いの役割をタテ、ヨコの連



繋を取りながら運営されているようです。縦割り行政がまだ残るどこかの国もこれを大いに参考にしてもらいたいと思います。その後、Moran氏が会長のWAI(Watersafe Auckland Inc.)を紹介されました。元校長でKevinの教え子のJanさんに指導要領(NZ Curriculum 2007)の水泳の扱いが僅か2行(Basic Aquatic Skills)だけであること、具体的な展開や指導プログラムはWAIが携わってWater Safe Teacher's GuideやIAP(Integrated Aquatic Programme)を実行していることを知らされました。これは、0~8歳までの子供を対象とした体系的な水泳学習モデルですが、理論と実技をいつ、どのような学習内容で教えるべきかを段階的に示した冊子です。例えば、Water Sence(水を感じる)から始まり、

Water Wise(水を知る)に至るまで泳げるようになることと合わせて、「溺れない」ためのサバイバル技術の徹底的な指導カリキュラム指針となっています。これらは従来の体育授業が経験則で全て片付けられ、科学的な根拠やシステムティックな授業研究などが行われていなかった弊害を解消するため大きな意義があると強調されていました。先導的なガイドラインが大学や社会のシステムとして必要であると感じました。また、NZ Curriculumにはここところからの発達・発達と合わせて、社会および国の一員として育てること(Citizenship)、自分たちの文化を築き上げるという意気込みがあるように思えました。



科学的な根拠やシステムティックな授業研究などが行われていなかった弊害を解消するため大きな意義があると強調されていました。先導的なガイドラインが大学や社会のシステムとして必要であると感じました。また、NZ Curriculumにはここところからの発達・発達と合わせて、社会および国の一員として育てること(Citizenship)、自分たちの文化を築き上げるという意気込みがあるように思えました。

4) 体育授業:ハカ(HAKA)&講義

ある日、小生のOfficeの前でハカの練習を学生達がやっていたので、PEスタッフのMikelに頼んで見せてもらいました。彼の小学校体育の教材研究授業のまとめとして、2つのグループに分かれてマオリ伝統文化の芸能パフォーマンスを発表することになっていました。ハカは



NZのラグビー代表、オールブラックスなどが試合前に鼓舞するマオリ戦士の戦いの踊りです。カメラを構えた小生の直前まで来て始まりの儀式をやってくれ、迫力のある立派なパフォーマンスで、大変感動しました。続いて、女子学生によるバチのパフォーマンス。なかなか、細かいテクニックとタイミングが必要な演技でしたが、これも見事に成功!拍手喝采。そのあと、全員でバチの演技で歌った歌詞を合唱して終わりました。実技はもちろんのこと、



講義でも彼らの授業を受ける態度は真剣そのもの。Kevinの水泳の基礎理論、バイオメカニクス分野の講義を拝聴させてもらいました。講義の途中でわからないことは即座に質問し、納得するまで教員とのやり取りをやっていたのが印象的でした。入学するのは簡単だが、卒業するのは難しく、かなり落とされると聞いた。自分で稼いだお金で授業料を払っているので絶対留年はできない。ここにもどこかの学生とは大違い。時間はタイトである。昼食などは学生も教員も30分もない様子。中には3時間目の授業中にリングをかじっている。教員は何も言わない。ちょっと考えられないが、お互い「あうん」の了解事項なのか?おもしろいと言うよりも唾然!これも文化の違いと思えばなんてことないのだろうと変に納得していました。

5) PEスタッフ&テニス仲間

PEのホームページによれば、非常に特徴的な経歴の持ち主ばかりです。ほとんどの人たちが小学校、中学校、高校の先生を10年~20年以上経てから大学の教員となっています。というよりも、以前のオークランド教育大学がそのようなシステムを組んでいたのではないかと推測され、教員は年配の女性が多く半数近くいます。



仕事は皆てきぱきと要領よくやって、午前のモーニングティー。雑談などなど。昼食はPEの食堂に皆集まってくる。夕方、4:30頃になるとまた、ティータイムでラグビー談義、世間話で5:00にはさっと家路につく。欧米のスタイルはいつもこんな感じなので、いつ仕事をしているのかと不思議でならない。でも、みんな気さくに声を掛けてくれました。

スタッフの一人、Mikeからテニスクラブに来ないかと誘われ、毎週月曜日の夕方から6~7人の仲間とプレイし



ました。皆、それぞれ異なった職業の持ち主。6:00頃からWarm Upや練習をして直ぐにダブルス試合、8:00頃終了。これで着替えて解散かと思いきや、クラブハウスの応接間でおもむろにビールを出して飲み出した。勝負のことやその愚痴などは一切話題にならず、ラグビーの話や日常でのことなどをジョークを交えて楽しむというスタイル。和気あいあいの雰囲気です。次回の再会を期してさっと解散。これがスポーツの原点と感じさせられました。

6) Aquatic Camp

今年の3月、再度Can Swim Projectの研究打ち合わせでU of Aに行ってきました。それとは別に体育の集中授業でTawharanui Marine Parkへ行きました。水



辺野外活動 (Skin Diving, Surfin, Lifesaving, Kaya-k) と Mountainbiking, Orienteering, Recreation Game など種目のローテーションをしながら受講者と指導者に別れてキャンプをしていました。1～3年生は参加者、4年生が指導者として1週間前から泊まり込みで準備、計画、運営の打ち合わせを済ませ、キャンプ期間中には



全てを取り仕切るシステムで実施されていました。教員はキャンプディレクターとして全体統括と運営にあたる仕組みです。合理的かつ実践的な教師教育システムなので是非我々も参考にしていきたいと感じました。宿泊は全てテントで寝袋。食事は自炊、トイレは水洗ではありませんでした。自然の厳しさもさることながら、アウトドアライフの原点を体験できました。しかし、4年生のしっかりとしたリーダーシップと教員らしさ?に本当に感心させられた2泊3日でした。因みに教育実習は4年間トータルで40週になるそうです。

7) 最後に

5ヶ月ほどの滞在でしたが、大変貴重な経験をさせて頂きました。我が大学と講座、Dr. Kevin Moran に感謝し、今後の活動に大いにフィードバックさせたいと思います。イギリスの影響を受けてスポーツが一つの文化として根付いているNZと同じように、我が国も生活の一部として広く国民の中に浸透していただきたいと思います。



NPO法人『体育とスポーツの図書館』の開館

堤 吉 郎 (NPO法人『体育とスポーツの図書館』理事 愛知県立大学非常勤講師)

民間で初めての専門図書館

NPO法人『体育とスポーツの図書館』(略称「スポーツ図書館」)は体育・スポーツ・健康教育に関する専門図書館である。2009年にNPO法人の認可を受け、2010年2月27日に開館した。

「中日新聞」「毎日新聞」「読売新聞」「矢作新報」などに取材を受け掲載をされているので、すでに読まれた方もあると思う。私たちが実践・研究のため集めた文献・資料が私たちの退職・退官とともに廃棄・散逸してしまうことはいかにももったいないという話が図書館設立のきっかけとなっている。

そこで、すでに退官された方の蔵書はどうなっているのだろう、退官を控えている方たちはどうするのだろうと思い、近い人たちに声をかけてみたところ、「実はどうしようかと思案していた」「残念ながら置き場に困って大量に処分してしまった」「そういうことならぜひ協力したい」…。様々な反応があって、貴重な本が送られてきたりしている。それなら本格的に蒐集して図書館にしまおうと考えた次第である。

開館式には東海体育学会を代表して穂丸武臣氏にご挨拶をいただいた。他にも体育科教育学会の先生方や地元中京大学の院生などの参加を得、私たちの仲間も他県にもかかわらず駆けつけてくれて開館式を大いに盛り上げてくれた。海外からはドイツのクルツ教授からメッセージを送っていただくなど、各方面からの協力を得て開館をすることができた。協力に感謝するとともに、各方面からの関心の高さにおどろいている。

また、地元足助町のみなさんには図書館づくりの当初から好意的に受け止められ、たくさんの支援と協力を得ている。古民家を改築してくださった棟梁の家は図書館の眼下にあって、図書館を見守ってくれている。図書館の整理作業には地元の主婦たちも協力して取り組んでくれた。開館式には地元の自治会長さんや議員さん、校長先生らにも参列をいただいた。地域の人たちにも関心を持って見守っていただいている。今後も、お互いに支援しあう関係づくりに努めていきたい。

国内はもとより海外ともつながりを深めたいという「グローバル」な視野と地元の人たちに支えられ、歓迎され、貢献していけるような「ローカル」な視点を併せ持つ図

書館として発展させていきたいと考えている。



写真:古民家を改築した足助の町の高台に建つ「スポーツ図書館」



写真:書架とミーティングルーム(机といすは配置は自由)

パンフレットに示された4つの役割

1:学習と研究をサポート

学生、教師、スポーツ指導者など、体育・スポーツや健康教育を学ぶ多くの方へ、国内外の文献の紹介や資料の提供をします。また、学習や研究の場としても利用することもできます。館内には専門的なアドバイザーが常駐しており、小中学生や高校生などの調べものやレポートづくりなどのサポートもします。

2:本との出会い

「文化としてのスポーツ」は、体育・スポーツ関係者だけの世界ではありません。“スポーツの本”を手にとってご覧いただくと、思いもかけない新たな発見や出会いがあるはずです。スポーツと文学、スポーツと芸術など多様に広がるスポーツの世界を愉しんでください。

3:イベントをつくる

体育・スポーツや健康教育に関する企画や展示などのイベントにどなたでも参加でき、楽しんでいただけます。また、一緒に企画や準備に関わることもできます。

貴重な史料やスポーツ用・器具なども展示してあり、

体育・スポーツの歴史に触れることができます。

4:くつろぎの場として

「スポーツ図書館」は足助の町並みを見渡せる高台にあります。13mにおよぶウッドデッキに腰を掛け、観音山の紅葉や、真弓山の名月や花火、銀座通りや足助側の灯りのプロムナード、「三本松の黄昏」など四季折々の風情を楽しんでください。

以上がパンフレットに記された4つの役割である。

『体育科教育』（大修館書店2010.5）に出原氏が「スポーツ文化を支える専門図書館の誕生」と題して特別寄稿している。その中で「歴史と社会と生活の結節点にスポーツ文化が位置づくことを浮かび上がらせるように、文献や資料を交差させ、結びあわせるのである」と述べているように、人文・社会科学系文献を中心に現在約1万冊ほどが集められている（将来的には5万冊ぐらいまで蒐集の予定）。

「文献や資料」と書かれているように文献だけではなく、「実践記録」を収集するというのも特徴のひとつである。文献による理論研究と現場における実践研究を往還させたいという考えるからである。

組合教研での提案冊子、民間教育団体の大会提案集、文科省や教育委員会の研修会冊子、研究指定校の報告書、各学校の研究紀要に掲載された実践記録や実戦報告などの中には貴重な「実選記録」が無数にある。雑誌のバックナンバーとして残されていくものもあるが多くの場合は時間の経過とともに消えていく。優れた「実践記録」はぜひとも残して活用したい。

実践を行うためには過去の先行実践にあたることはとても重要なことである。自分のオリジナルだと思っていた実践が過去にもあったことを発見したり、余計に這い回ることをしなくて済んだり、先行実践の成果をもとにすることで高いレベルから実践をスタートさせられるなどのメリットがある。実践・研究を進めていく上で大いに役立てることができるのである。

文献や資料をもとにして卒論や修論を書くことができる場にもしたい。学習会の会場としても利用できる。実際、すでに学習会が開催されている。私の主催するささやかな体育学習会は、開館間もない3月20日の午前中に講演会を持ち、午後から自分たちが1年間取り組んできた体育の学習会のまとめをするという形で利用させてもらった。さらに、ここで学習するだけでなく、学んだ成果を報告する、講演する、発表するという形で、ここから様々な内容を発信していきたいと考えている。

イベントをつくる

近々のことと言えば、サッカーのワールドカップにあわせてサッカーの「文献と資料」を一カ所に集めて展示をしたいと考えている。

文献と資料を並べるだけでなく、フットボールの歴史をたどってみる。イギリスのバーの研究をしている吉田文久氏の現地取材の写真などを展示してもらったり、VT RやDVDなどによる映像資料を放映したりして、サッカーについての教養を高めてもらう。

その上で、今回のワールドカップを観戦してみてもどうか。サッカーがもっと身近なものに感じられるはずである。また、新たな視点を得て観戦することで思わぬ発見があるかもしれない。また、サッカー好きの仲間がここに集まってサッカー談義に花を咲かせるというのも楽しい。館内には、いすとテーブルがあり、ひざをつきあわせてということであれば、囲炉裏をきった部屋がある。また、館外にはテーブルつきのいすがあり、縁側もある。活用方法・活用形態は多種多様であり、いろいろな使われ方を工夫してもらうことも私たちの願いである。

イベント案は思いつくままに挙げてみただけでも数十に及ぶ。「サッカー」特集のように各種目別の大会などに関連づければ種目の数だけある。世界陸上やワールドベースボールクラシック、駅伝、テニスやゴルフの世界大会…等々である。4年に一度やってくるオリンピック・パラリンピックも貴重な研究の機会であり、学習の機会でもある。過去のオリンピック（例えば東京オリンピック）の特集を組むことも可能である。

女性とスポーツ、障害児・者の体育・スポーツ、子どもとスポーツ、子どものスポーツ本の展示、メディアとスポーツ、イギリスのスポーツとアメリカのスポーツ比較研究…等々も魅力的なテーマである。また、スポーツノンフィクションの世界を紹介したり、中村敏雄、玉木正之といった人物に焦点を当てた特集を組んでみるのもおもしろい。

他団体と共催するという可能性もある。みなさんのアイデアをぜひ寄せていただきたいと願っている。

お願い

「スポーツ図書館」ではNPO（非営利団体）である特徴や民間で取り組むことのメリットを最大限に活かした「運動」を進めようとしている。公的資金やスポンサーなど一切ないが、その分自由な発想で主体性を持って活動することができる。

会の運営は、多くの支援者の「志」と支援によって成り立っている。みなさんにはアイデアを寄せていただく

ことと、下記に挙げたいいくつかの支援をお願いしたい。

1.蔵書や資料などの寄贈

次のような文献や資料の寄贈をお願いします。

- ①体育・スポーツ・健康教育(含む健康教育)に関する文献と資料など。
- ②『体育科教育』『陸上競技マガジン』『バレーボールマガジン』などの専門雑誌のバックナンバー。特に初期のもの。
- ③教育実践の実践記録や実践報告。官、民を問わず、各種研究会で発表された実践記録類。冊子になったもの。
- ④行政関連文書。文科省関連の各種文書、および、地方教育委員会の各種文書や資料など。

2.寄贈にあたってのお願い

- ①宅配便などでお送りください。あて先は「スポーツ図書館」宛。なお、送料は申し訳ありませんがご負担ください。
- ②ご寄贈いただいた文献・資料などは寄贈者のお名前を刻印した上で配架します。また、図書館玄関

のボード(寄贈者一覧)にお名前を掲げます。

3.「寄付」のお願いと「賛助会員」入会のお願い

図書館の運営はみなさんからの「寄付」と「会費」によって運営されています。「寄付」はすでに多くの個人、団体から寄せられています。「賛助会員」入会には、入会金1万円+年会費5000円をいただいています。「賛助会員」のみなさんには図書館利用の便宜を図り、定期的に『通信』を届けます。

「スポーツ図書館」の所在地等

〈所在地〉〒444-2424

愛知県豊田市足助町城山49-2

〈館長〉成瀬 徹

〈TEL&FAX〉0565-62-3500

〈Eメール〉sports@asuke.aitai.ne.jp

〈ホームページ〉<http://sportslibrary.web.fc2.com/>

〈開館日〉毎週:水・木・金・土

休館:日・月・火・祝日

(利用日の相談に応じます)

【お知らせ】

理事会からのお知らせとお願い

東海体育学会会長 穂 丸 武 臣

現在、理事会では理事選出方法の変更を検討中です。これには会則の変更が必要となり、今秋の総会で会員の皆様の承認を得たいと考えています。本件は総会での審議事項ですが、変更理由等の詳細を総会で皆様にご理解いただいた後に議論を始めますとかなりの時間を要します。従いまして、その理由、内容などについて、以下の通り事前に会員の皆さま方へ周知させていただきますので、ご意見がございましたら電子メールまたはFAXで、東海体育学会事務局までお寄せください。

会長および理事選出方法の改正について

【背景および経緯】

以下の会則新旧対照表(案)右欄にありますように、本学会では、会員数を基に理事定数を決定し、その選出に当たっては、正会員からの郵送投票の結果に従って各県別に得票数上位2名(計8名)を決定する一次選出、残りをそれら8名を除く同郵送投票の上位得票者に対する直接選挙で選ぶ二次選出の二段階選抜方式を取っており、後者は学会大会総会の中で行われています。この方式には、理事選挙年の総会時間延長により学会大会スケジュールが制約を受ける、大会当番校の負担が増す、開票作業のため選挙担当理事が学会大会プログラムに参加できない等の問題点に加え、選挙(学会大会)開催地が選挙結果に影響を及ぼす、現在の県単位の選出方法では当選理事獲得票数の地域格差が生じやすいなどの問題があります。

【選挙方法改正案】

以下の会則新旧対照表(案)左欄にありますように、郵送投票の結果を基に、岐阜、三重、静岡の3県の獲得票数上位者2名、愛知県については学会大会開催地域(尾張、名古屋北、名古屋南、三河)別に同上位者2名、合計14名を地区選出理事として選出します。次に、理事定数から14を引いた人数を、同郵送投票の残りの得票者の中から得票数順に選出します。従って、総会時の理事選挙は行われないこととなります。

【改正によって得られる効果】

選挙結果が選挙開催地の影響を受けなくなります。郵送選挙のみで理事を決定することで理事選挙が簡素化され、選挙年の学会大会当番校の負担が軽減されます。愛知県については、学会大会開催地域を配慮した4分割区から理事が選出されることで理事会および学会大会運営に関わる知識・情報の継承が可能となり、次年度以降の学会大会運営の円滑化が期待できます。選出理事の選出地区の違いによる獲得票格差の是正につながります。

なお、会長選挙も郵送投票のみとするという意見が理事会において出されましたが、これについては総会における負担が少ないため現行通りでよいという意見もあり、理事の間でも意見が分かれています。従いまして、会長選挙に対する理事会提案はありませんが、改正する場合には下の2番目の表にある改正が妥当かであると考えています。

改正する会則についての新旧対照表(案)

●理事選出方法のみの変更

新	旧
第10条 役員の任期は、 <u>郵送</u> での選挙後の1月1日より、その翌年の12月31日までの2年間とし、2期の重任を限度とする。	第10条 役員の任期は、 <u>通常総会</u> での選挙後の1月1日より、その翌年の12月31日までの2年間とし、2期の重任を限度とする。

●理事選出方法のみの変更(続き)

新	旧
第17条 通常総会は毎年1回学会大会の際に開き、出席した正会員を以って構成する。総会は会長(削除)の選出を行うほか、役員の提出する重要事項を議決する。総会は会長がこれを招集する。	第17条 通常総会は毎年1回学会大会の際に開き、出席した正会員を以って構成する。総会は会長および理事の選出を行うほか、役員の提出する重要事項を議決する。総会は会長がこれを招集する。
第29条 会長(削除)の選挙は、総会における出席正会員によって行う。	第29条 会長、理事の選挙は、総会における出席正会員によって行う。
第33条 理事の選挙は、正会員の書面による5名連記無記名投票により、愛知県を除く各県および愛知県4地域別に得票数上位2名の計14名の理事を選出し、(削除)残りの理事を得票上位者から選出する。ただし、末位のものの得票数が同数の場合には、抽選により決定する。	第33条 理事の選挙は、正会員の書面による5名連記無記名投票により、(追加)各県(追加)別に得票数上位2名の計8名の理事を選出し、残りの理事定数の2倍を理事候補者とする。その理事候補者の中から総会時の5名連記無記名投票により、残りの理事を得票上位者から選出する。ただし、末位のものの得票数が同数の場合には、抽選により決定する。

●会長選出方法も郵送のみとする場合

新	旧
第10条 同上	第10条 同上
第17条 通常総会は毎年1回学会大会の際に開き、出席した正会員を以って構成する。総会は(削除)役員の提出する重要事項を議決する。総会は会長がこれを招集する。	第17条 通常総会は毎年1回学会大会の際に開き、出席した正会員を以って構成する。総会は会長および理事の選出を行うほか、役員の提出する重要事項を議決する。総会は会長がこれを招集する。
第29条 (削除)	第29条 会長、理事の選挙は、総会における出席正会員によって行う。
第32条 会長の選挙は、正会員の書面による単記無記名投票(削除)により行う。(削除)単記無記名投票で過半数得票者がいない場合は、得票数上位2名までのもの(得票数が同数の場合には該当者全員)について総会で再投票により選出する。	第32条 会長の選挙は、正会員の書面による単記無記名投票により、得票数上位3名を会長候補者とし、総会時の単記無記名投票により行う。ただし、3位のものの得票数が同数の場合はその全員を会長候補者とする。総会時の第1回の投票で過半数得票者がいない場合は、得票数上位2名までのものについて(追加)再投票により選出する。

本案件は、会則の改正が必要であるため総会での審議事項となります。出来れば選挙年である来年度より運用したく、理事会の意向を総会前に会員へ周知した上で今年度の総会議案とすることを目指しております。これに対する会員の皆様からのご意見を電子メールまたはFAXで、東海体育学会事務局までお寄せください。

Fax:0561-62-0083

e-mail:tspe@htc.nagoya-u.ac.jp

なお、Faxの際は、「東海体育学会事務局宛」である事を最初に明記してください。

以上、よろしくお願いします。

庶務委員会からのお知らせ

庶務委員長 石垣 享
小栗 和雄

1.東海体育学会の役員

平成22年度の東海体育学会の役員一覧を以下の表に記載いたします。

平成22年度の第1回理事会(平成22年1月23日)において、斎藤由美先生(名古屋造形大学)および野中壽子(名古屋市立大学)が監事として新任されました。また、同理事会で田中望先生(愛知工業大学)が幹事として新任されました。

氏 名	役職	所属
穂丸 武臣	会長	名古屋経営短期大学
花井 忠征	理事長	中部大学
石垣 享	庶務	愛知県立芸術大学
小栗 和雄	庶務	静岡産業大学
富岡 徹	会計	名城大学
池上 久子	学会(長)	南山大学
酒井 俊郎	学会(副)	浜松学院大学
飯本 雄二	学会	至学館大学
片山 敬章	学会	名古屋大学
高石 鉄雄	学会	名古屋市立大学
鶴原 香代子	学会	愛知淑徳大学
石田 直章	企画(長)	名古屋芸術大学
寺田 恭子	企画(副)	名古屋短期大学
秋間 広	企画	名古屋大学
大桑 哲男	企画	名古屋工業大学
岡野 昇	企画	三重大学
森 悟	企画	東海学園大学
岡本 敦	広報(長)	東海学園大学
山本 英弘	広報(副)	朝日大学
菅嶋 康浩	広報	名古屋芸術大学
富樫 健二	広報	三重大学
山本 達三	広報	愛知学泉大学
山本 裕二	編集(長)	名古屋大学
合屋 十四秋	編集(副)	愛知教育大学
齊藤 満	編集	愛知学院大学
杉浦 春雄	編集	岐阜薬科大学
正 美智子	編集	名古屋学芸大学
秦 真人	編集	愛知学泉短期大学
斎藤 由美	監事	名古屋造形大学
野中 壽子	監事	名古屋市立大学
田中 望	幹事	愛知工業大学

2.会員の消息

※新入会員

宇佐美 真(愛知教育大学)
西口 雄生(愛知教育大学)
高橋 恵理子(愛知教育大学)
安藤 佳代子(東海学園大学)
高橋 孝郎(愛知学院大学)
成宮 宏俊(東海学園大学)
玉木 直也(元気学園)
石原 雅美
伊藤 秀郎(愛知学院大学)
竹之下 秀樹(名古屋学院大学)
松本 香奈(岐阜女子大学)
大矢 隆二(常葉学園大学)
長屋 和将(岐阜大学)
大槻 洋也(至学館大学)
建部 貴弘(中京大学)
柳瀬 慶子(四日市市立笹川西小学校)
伊賀 崇人(静岡大学)
長谷川 弓子(中京大学)
岡本 暁子(名古屋市障害者スポーツセンター)
笹川 慶(中京大学)
東 哲久(愛知教育大学)
土田 洋(愛知淑徳大学)
中田 有紀(東海学園大学)
山下 直之(中京大学)
伊藤 僚(中京大学)
佐宗 敬泰(愛知教育大学)
窪田 泰三(岐阜大学)
村松 愛梨奈(愛知教育大学)
御園 慎一郎(愛知東邦大学)
橋本 泰裕(中京大学)

※所属機関変更

穂丸 武臣(名古屋経営短期大学)
稲村 欣作(富士常葉大学)
黄 永顕(愛知県立西尾高校)
久保田 晃生(東海大学)

居崎 時江（東海学院大学）
金柅 直也（南知多町立豊浜中学校）
山田 悟史（静岡産業大学）
山内 章裕（愛知江南短期大学）
市野 聖治（鈴鹿国際大学）
森下 義隆（国立スポーツ科学センター）
星川 保（金沢星陵大学）
石川 幸生（愛知東邦大学）
大西 範和（三重県立看護大学）
丹羽 正人（中京大学）
望月 知徳（静岡理工科大学）
野々宮 徹（名古屋柳城短期大学）
蘭 和真（東海学院大学）
林 享（東海学園大学）
鈴木 一成（名古屋市長柳小学校）
荒賀 博志（奈良教育大学）
梅原 大介（名古屋市長平和小学校）
大畑 美喜子（岐阜大学）
加藤 彰浩（名古屋柳城短期大学）
川口 啓（星城大学）
塩見 哲大（中京大学）
新海 宏成（愛知淑徳大学）
鈴木 幸（裾野市立深良中学校）
出口 順子（東海学園大学）
中里 浩介（University of Salzburg）
中野 秀治（多治見市立笠原中学校）
野田 昌宏（浜松市立中郡小学校）
野田 善昭（岐阜県立大垣工業高校）
堀田 典生（愛知淑徳大学）
村岡 眞澄（東海学園大学）
山根 真紀（日本福祉大学）
山根 基（愛知みずほ大学）
甲田 道子（中部大学）
齊藤 満（愛知学院大学）

※転入会員

出原 泰明（愛知学泉大学）
内田 智子
牧野 達弥（蘇南中学校）
久保田 浩史（岐阜大学）
大村 知弘
竹内 亮（静岡県総合健康センター）
内藤 正和（愛知学院大学）
佐藤 剛史（株式会社名古屋グランパスエイト）

清水 一巳（名古屋女子大学短期大学部）
船橋 孝恵（名古屋大学）

※転出会員

村本 名史（山口福祉文化大学）
山本 薫（名桜大学）
天野 和彦（東北学院大学）
瀧本 厚子（群馬大学医学部附属病院）
村上 佳司（天理大学）

※氏名変更

本多 広国（岐阜女子大学） 旧姓 井上
松本 みく（愛知県健康づくり振興事業団） 旧姓 加藤

※退会

粕谷 陽佑
早水 サヨ子
吉田 正
亀井 貞次
田畑 昭秀
山田 知通
天野 博江
中尾 隆行
高邑 和樹
下里 勝
井本 岳秋
松岡 敏恵
林 邦夫
三井 孝
木宮 敬信
大野木 伸幸
山本 浩貴
松ヶ谷 光廣
大胡田 茂夫
平野 朋枝
小野 勝敏

3.東海体育学会事務局移転について

平成22年1月から、東海体育学会事務局が名古屋市立大学より以下へ移転いたしました。東海体育学会に対するご意見またはご希望がありましたら、事務局までご連絡をください。なお、Faxの際は、「東海体育学会事務局宛」である事を最初に明記してください。
東海体育学会事務局住所：

〒480-1194 愛知郡長久手町大字岩作字三ヶ峯1-114
愛知県立芸術大学 美術学部
身体運動・健康科学研究室
Tel:0561-62-1180(内線403)
Fax:0561-62-0083
e-mail:tspe@htc.nagoya-u.ac.jp

4.日本体育学会・東海体育学会への登録・訂正等

日本体育学会会員の方は名簿に訂正箇所がありましたら、学会員名簿や体育学研究の折込用紙を利用して、日本体育学会へ訂正依頼をお願いいたします。さらに、東海体育学会の方へもe-mail等を利用してお伝えください。なお、東海体育学会のみの会員の方は東海体育学会事務局(上記3)までお知らせください。

5.学会費の納入

日本体育学会会員の方は、預金口座による自動振込みをご利用頂きたいと思っております。自動振込みの申請用紙が必要な方は東海体育学会事務局にご請求ください。東海体育学会のみの会員の方は東海体育学会の郵便振替口座に年会費3,500円を納入ください。
東海体育学会 郵便振替口座番号:00870-8-41336

編集後記

2010年2月12日から28日にカナダのバンクーバーで第21回オリンピック冬季競技大会が、3月12日から21日にパラリンピックが開催されました。オリンピックで日本は銀メダル3個、銅メダル2個の計5個のメダルを獲得し、メダル獲得数では20位でした。やや期待はずれではあったものの、女子フィギュアスケートの浅田麻央選手とキム・ヨナ選手の演技に感動した人も多かったことと思います。

本会報では特集1:バンクーバー・オリンピックとして東海大学の森先生にコーチの立場から、中京大学の内藤先生にトレーナーの立場から参戦記をご執筆いただきました。また特集2:バンクーバー・パラリンピックとして豊田工業大学の道用先生にパラリンピックの解説を、コーチの北村先生に参戦記をご執筆頂きました。これらの特集では、選手の肖像権やマネジメント契約など、選手のプロ化によって個人の写真やデータなどが利用できなくなっている事を痛感させられました。このような

状況の中でご執筆頂いた先生方には本当に感謝致します。

また、在外研修報告として名古屋大学の秋間先生と愛知教育大学の合屋先生には、海外での貴重な経験をご執筆頂きました。若手研究者の方々のご参考になればと思います。

NPO法人「体育とスポーツの図書館」理事の堤先生には2010年2月27日に開館した「体育とスポーツの図書館」をご紹介頂きました。

その他、各種委員会の前委員長の方々など、多くの先生のご協力によって本会報を完成することができました。この場を借りて御礼申し上げます。

広報委員会では会員の皆様に役立つ情報を少しでも多く掲載したいと考えています。広報員会への情報提供を宜しくお願い致します。

広報委員会委員長 岡 本 敦

東海体育学会会報 No.83

発行日 2010年6月10日 発行 東海体育学会 編集 広報委員会
事務局 〒480-1194 愛知郡長久手町大字岩作字三ヶ峯1-114
愛知県立芸術大学 美術学部 身体運動・健康科学研究室
TEL/0561-62-1180(内線403) FAX/0561-62-0083
E-mail tspe@htc.nagoya-u.ac.jp
ホームページ <http://www.tspe.jp/>
